文化継承・コミュニティ活性化特別委員会

令和６年１０月７日

１　これまでの勉強会について

（１）神保町、本のまちの継承

（２）震災 101 年と桜の継承

２　今後の調査について

３　その他

４　閉会中の特定事件継続調査事項について

委員会資料　1 - 1
令和６年 10 月７日

令和５年１２月５日　講師　八木壯一（神田古書店連盟顧問）
髙山　肇（神田古書店連盟顧問）
テーマ　　『神保町、本の街の継承について』

１　講演概要

八木さんのお話：神保町の街ができて１５０年、古書店街になってからは約１００年。関東大震災や大きな火災・太平洋戦争ではアメリカにおいて「文化の街を燃やすな」という逸話もあり、これは映画にもなっている。戦災は免れ、バブルも乗り越え、いまがある。神保町には、いまでも１３０件の古本屋がある。
・日本を代表する大学、学校、いっしょに発展してきた古書店、出版社。日本人はみな本が好き、その需要に応えるため神保町の本屋は続いている。
・古書店は大英図書館・ハーバード、世界各国と取引をしている。古書目録があるので、全国の研究者から注文をいただく。奈良時代・鎌倉時代のものもある。
・古書は定価では買えないようなもの、古本は定価で売っているもの、大雑把な区分。
・古本まつりは、初回から千代田区と共催（遠山区長)、今年で６０回。
・古書会館を中心に、協同組合として力を合わせてやっていく。
髙山さんのお話：神保町の古書店は１３０件それぞれに専門があって、囲碁将棋や建築、海外の方でも探しにくれば、古書店地図帳で照会ができる。お互い様で連なる強み。
・関係が密で親戚のように仲良く商売を続けている。
・昭和４６年都営新宿線の工事が始まり、古書店街の木造長屋が壊れるような揺れで区議会に陳情、交通局に説明をさせたところ、高速道路をつくるという話に。みんなで反対運動してこれをつぶす。商店街はさらに結束した。
・工区の建設会社によって、新しく共同ビル化して、古書センターができて、４５年。
・関東大震災から５０年で古書店をつくり、５０年たって現在が建て替えの時期。
・明治大学の田村先生の試算では、容積７００、２５坪で９階建て、１階に古書店上を貸しても採算はあわない。街区全体をまとめて、駐車場の附置義務も緩和する。車がなくても、商売はできる。路面はなんとか、本屋が残り、昔からのお店を残したい。オフィスやマンションにしては、魅力も活気もなくなってしまう。
・区と区議会と相談して、まちの伝統・文化に寄り添ったお店屋さんが出てくるような施策をしてもらいたい。
・商店・商業は文化だと思う。
・司馬遼太郎さんのことば「神田かいわいは世界でも有数のもの学びのまち」。
・本の街神保町を守っていく誇りと覚悟を持って、これからも訴えていく。

２　課題と方針に関する集約案（たたき台）

●現状と課題案：神保町は、明治期より日本を代表する大学や本を愛する人たちの求めに応じて、本の街として発展してきた。大正時代から東京古書会館を拠点に協同組合をつくり、現在でも１３０ある古書店が専門分野をもって横につながり、紹介しあいながら古書店街を継承している。世界や日本中の問い合わせ、本の需要に応えている。千代田区と共催で続ける「古本まつり」も６０回を重ねた。震災も戦災もバブルも乗り越えてきた神保町だが、商業文化を継承するにあたって、課題は以下のとおり。

１点目、商店街の多くの建物が旧耐震で、建て替え時期を迎え、あと１０年のうちに進めていかねばならないと考えている。周辺ではマンションやオフィスに代わってしまっているが、商売は文化であり、古書店や伝統文化にかかわる商売を継承したいと考えると、採算上の問題がある。共同化する際の問題、駐車場附置によって商店街が軒を連ねることがでない、宅配で届ける時代に駐車場がそれほど必要ではない。

２点目、１５年位前から「神保町を元気にする会」を手弁当で続けている。この地域雑誌を続けていくには、たとえばエリアマネジメントなど安定した仕組みの中で、実現できないかと考えている。

そうした課題を乗り越えて、商店という文化を引き継ぐため、区と区議会が状況を理解して後押ししてもらいたい。

●方針案：本の街神保町が将来に向かって、文化継承をしていけるように、千代田区と千代田区議会は、課題を共有し、その解決のため情報を収集し、効果的な方策を見出すべく議論を尽くす。

当委員会としては、連なる商店街の妨げとなる、駐車場附置義務の緩和、１階店舗が可能な限り古書店として自前の商いを続け、特色を継承してなお採算が合う現実的な方法を、見出すように側面から支援していく。

商店街事務局の支援強化、もしくはエリアマネジメントなどのテーブルを強化し、地域雑誌の継続するための民間の力を、千代田区が後押しすることを求める。

以上。

委員会資料　1-2
令和6年10月7日

令和 5年12月 5日 文化継承・コミュニティ活性化特別委員会 勉強会
「神保町、本のまちの継承」

〇小枝委員長　今回、勉強会のテーマとして、神保町、本のまちの継承についてを取り上げさせていただきました。当委員会では、文化の継承及びコミュニティの活性化等について調査研究を行っております。５月に委員会が設置されて以降、当委員会で具体的に取り扱う内容について委員会の中で話し合ってまいりました。前回、１０月４日実施の委員会において、神保町、本のまちの継承についてお話しいただける方をお呼びし、勉強させていただくことになりました。このような経緯から、今回、講師をお招きし、勉強会を開催する運びとなっております。

なお、この勉強会は、当委員会委員以外の議員や、その他どなたでも傍聴していただくということを前提としております。ご了承ください。

本日は、講師として神田古書店連盟顧問である髙山肇様と、同じく神田古書店連盟顧問である八木壯一様のお二方にお越しを頂いております。

それでは、副委員長のほうから講師のご紹介お願いします。

〇入山副委員長　では、お越しいただきました講師をご紹介いたします。

まず初めに、神田古書店連盟顧問であります髙山肇様です。少し略歴をご紹介させていただきます。

髙山様は、平成２７年まで千代田区議会議員を務められ、また、明治時代から神保町で古書店を営んでいる髙山本店の４代目の店主です。現在は神田古書店連盟の顧問であり、また千代田区商店街連合会の会長、千代田区観光協会の副会長など、千代田区の公共団体の要職を務められております。

続きまして、同じく神田古書店連盟顧問であります八木壯一様です。八木様は、現在、神田古書店連盟の顧問であり、また、株式会社八木書店ホールディングス代表取締役社長を務められていらっしゃいます。八木書店は昭和９年、日本古書通信社として創業以来、書籍の情報発信、古書売買、出版社の在庫買入れ、販売、学術書の出版と、神保町を中心として広く書籍を扱っていらっしゃいます。また、本の街神保町の関係で講演をされている実績がございます。

本日はこのお二方からご講義を頂きます。どうぞよろしくお願いいたします。

（拍手）

〇小枝委員長　ありがとうございます。

副委員長のほうから講師の略歴をご紹介くださいました。お二人ともまさに今回のテーマに精通した方でいらっしゃいます。

進め方といたしましては、まず八木さんのほうから神保町の歴史についてのお話を頂き、その後、髙山さんのほうから今後の課題、現在の課題等についてお話を頂けるものと伺っております。お二人合わせて１時間ぐらいということで、質疑の時間を含め１時間半、３時ぐらいをめどに終えていくという流れで考えております。

それでは、早速ですけれども、八木さんのほうからお話をお願いいたします。今日こちらにレジュメのほうも皆様のお手元に配付しております。それからこちら、「神保町が好きだ！」、この１７号です。皆さん、お手元にあると思います。あとは東京古書会館のガイドブック、そして「古書暮らし」、この冊子ですね。皆さん、お手元にありますか。傍聴席のほうは足りな

い部分もあるかもしれませんけれども、お話の中心はこの「神保町が好きだ！」という、ここに書かれている中身だと伺っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。
　よろしいですか。
○八木氏　初めまして。八木書店の八木と申します。今日は貴重な時間を割いていただいて、神保町の私がやっていること、やってきたことについて、少しばかりお話をさせていただきます。ちょっと腰をかけてやらせて……
○小枝委員長　お座りください。
○八木氏　お手元にお配りしました「神保町が好きだ！」というこれは、今回１７号になるんですけども、私どもで「神保町を元気にする会」というものをやっておりまして、それは小学館さんとか三省堂さんですとか、神保町の関係の出版関係団体が入って、今までも幾つかのことをやってきていまして、今回の特集が第１７号で、神保氏の古書街の歴史を特集しております。これは、私があるところでしゃべったことを基にして、今日ご出席の野上さん、佐藤さんがこれを編集して、大変分かりやすくまとめていただいております。ぜひ読んでいただければ分かりがいいだろうなというふうに思っております。
　また、写真については、これは元千代田区役所にいた方の写真を、ちょっと私、今、名前、何といったっけ。
○小枝委員長　小藤田さん。
○八木氏　小藤田さんの写真を使わせてもらったんですが、ちょっとこの小藤田さんの名前が外れていまして、大変失礼いたしております。
　そんなことで、神保町の約１５０、神保町があって、まちができて１５０年だと思うんですけども、古書街ができて１００年になるかと思いますが、その概要だけを、概要というのか、その問題点というのか、を話しさせていただきます。
　今、これで２時１０分までやりゃいいのかな。ですかね。（発言する者あり）そうですね。はい。まあ、そのぐらいのつもりで。よろしいですか。
○小枝委員長　もう少しで。はい。
○八木氏　はい。
　それで、まず日本という国が世界でも珍しいぐらいに、珍しいというのか、古くからの本がたくさんに残っている国です。今この、ここに、これは複製なんですけど、百万塔陀羅尼教という、百万塔陀羅尼ですが、この中にこういうお経が入っていまして、これが法隆寺だけに今残っていまして、これが、これは複製ですからね、こんないいかげんに扱っていますけど、本物はちょっともう少し丁寧に扱わなきゃいけないんですが、これを、ちょうど明治４１年に法隆寺が財政的に逼迫しまして、それを一般に民間に分けました。それを私どもでも扱うことができまして、西暦７７０年のものですけども、こんな古いものを一介の古書業者が扱えるというのは日本だけでございます。それで、私どもでもこれを幾つか持っておりまして、必要があればお分けさせてもらっているということです。それで、これは木版刷りなんです。木版か銅板かまだ意見も分かれていて、はっきりしていないんですけど、一応木版刷りでなっております。それで、製版で１枚刷りのものです。その後、活字が江戸時代の初めの後できてくるんですけども、その前の製版、印刷、１枚刷りのものです。
　こういうものをはじめとして、これが奈良時代ですが、奈良時代は印刷物はほかにありませ

んで、みんな写経、書いたものです。あるいは平安朝も、本は少ないんですけども、書いたもので、印刷がちょっと正倉院に少し二、三点残っているんですが、ほかは全部書いたものとしてありまして、私ども業者は扱うことはほとんどできません。鎌倉時代になりますと、私どもが扱うことができまして、いわゆる版本なども扱いますし、写本なんかも扱います。あるいはほかの物語みたいなもの、それはさすがに私どもで手に負えるものはなかなか出てこないんですけども、そういうものが鎌倉時代で扱います。それで、鎌倉から室町になると、たくさんの本を扱うことができまして、それで、特に江戸時代になりますと、版本も扱って、それから写本も多く扱える。そういうものが日本の古本屋としては多く扱えるもので、世界でもまれな国でございます。

その中で、ちょうど江戸の終わり頃にイギリスの大使館にアーネスト・サトウと――お名前を聞かれた方はおられると思うんですけども――がおりまして、その人が日本の本に大変興味を持ちまして、外交官ですので日本各地を旅行するんですが、そのたびに日本の本を買い集めて、それを現在、大英図書館などに収めております。そのほかに、その後、チェンバレンですとかアストンですとか、何人かの外国人が日本の本に興味を持って買い上げ、それをそれぞれの国に持っていっております。

外国人が日本の本に興味を持つのは、それだけじゃなしにその後ずっと続いていまして、現在でも私どもでの古書部でハーバードですとか幾つかの大学に日本の本を納めさせてもらっていまして、それは何も私どもだけじゃなしに、東京にある古書店の何軒かはみんな外国との取引をやっております。

それで、そういう古いものの扱いを、日本の業者は、当然海外だけじゃなしに、日本の大学とか研究機関などにも扱わせてもらっていまして、神保町にそういうところから注文が来たり本を見に来られたり、あるいは、せんだってありましたけども、古典会という会がありまして、入札会なんですが、そのときにもそういうものに下見に並んで、それを皆さんが見に来られて、私どもが注文を受けて注文を頂くということになります。あるいは古書目録を出して、全国の研究者、研究機関から注文を頂くということになっております。

それは、そういう古いものだけじゃなしに、明治以降に日本にはたくさんの本ができております。そういうものをまた同じように扱っていまして、それが私どもで言うと、大ざっぱに言うと、古書と古本とに分けられると思っています。古本というのは、現在定価で売っているようなものを安く、安さで売っていくということです。古書はそういうものじゃなしに、もう定価では買うことができないというものです。

そういう古本屋、古書店が神保町にはたくさん集まっていまして、ただ、もう今問題なのは、そういう古いものを、国会図書館をはじめとして、コピーして分けるんですね。それは読者にとっちゃいいんですけど、本屋にとっちゃかなわないなというところがありまして、そこら辺は、今、古書店にとってはちょっとやりにくいところが今は出てきております。

けど、そういう中でも、ただ、そういう古いものを扱っている、今、神保町に１３０軒ぐらいの古本屋がありますけども、今お手元に先ほどご案内いただいた古書店地図帳というのをお配りしていますが、その古書店地図帳を見ていただくと、いろんな分野の、文学から古典籍から、ずっといろんな分野の古本屋があるというのが一目で分かって、ご理解いただけるかと思います。これだけの古本屋があって、それがこの神保町の各地にあります。

あと、この神保町の地図を見ていただくと、明治以降で古書店ができてから、やはりいろんな天変がありまして、一時は小川町のほうから神保町のほうまでずっと並んでいた頃もあるし、水道橋のほうに多くの店があったりしたことがありましたけど、一番大きいのは関東大震災でもって店のありようが変わりました。それでもそれを乗り越えて今来ていると。

神保町のまちを見ますと、明治の初めに大きな火災が起きています。それから大正のときに大きな火災が起きまして、そのときに神保町は随分変わるんですが、その後は関東大震災でもちろん罹災を受けました。ただ、太平洋戦争では幸いに神保町は爆撃を免れました。それはエリセーエフというアメリカ人が、まあロシア人とも言うんですけど、その人がマッカーサーに、あそこは文化のまちだから爆弾を落とさないでくれと言って、それが通ったという逸話が残っております。それも映画になったこともあるんですけども、そのおかげもあって戦災を神保町は免れまして、それで現在のまちが残っているということだろうと思います。

それからあと、バブルの頃も神保町は随分、一部は強く攻撃を受けたんですけど、皆様のご支援もあって現在に残ることができております。今後どれぐらい残っていくか、またいろいろ問題がありますけども、そういうことで現在の神保町が残っているということをご認識いただければと思いますし、今後とも残っていくように、ひとつお力添えを頂ければというふうに思います。

次に、神保町にこれだけ古本屋が多いというのは、お分かりのように大学ができて、最初は、明治の初めは東京大学をはじめ官立の大学ですが、その後、東大は本郷に行き、ほかの大学なんかもそれぞれ郊外に移りまして、その後に私立大学ができます。日本大学をはじめ、明治だとか専修ですとか多くの大学ができて、その大学があったために神保町はまた本屋街として栄えていったということだろうと私は思っておりまして、そのほかに駿河台だとかなどには、高級官僚ですとか三菱ですとかなんかの財閥の人たちが住んだりしておりまして、その人たちがやっぱり本屋のお客さんであったということだろうと思っています。

日本人というのは本が好きなんでしょうか。今、ＮＨＫの連ドラの徳川家康を見ていても、よく本の蔵が出てくる。私なんかはすぐ目につくんですけど、家康が本を好きな人だったようですけども、よく本のことが、本がテレビの中でも出てきておりまして、それこれ、何しろ本を好きな日本人ということがあるのでしょうけど、何しろ神保町にはそういう人たちの需要に応えるための本屋がずっと続いてきているということだろうと思っています。

それからもう一つは、先ほどお話しした火災に耐えたことということがあると思います。

それともう一つ、四つ目として、東京の古書会館というものが駿河台下にございます。その古書会館の東京古書会館活用ガイドブックというのをこのお手元に配らせてもらっていますけども、これを見ていただくと、今、古書会館が大正の初めにできて、それ以来ずっとそこで市場を経営し、いろんな古書店に対するサービスをやっておりまして、これがあるためにやっぱり神保町に古書店があると言っていいんだろうと思っています。

お配りしたものの８ページを見ていただくと分かるんですけども、そこに中央市会というのを月曜日にやっていまして、一般書の市をやっておりまして、前の日曜日から荷物が古書会館に運び込まれて、それを仕分をして、それで入札していくということで、ご近所にはそういう意味ではご迷惑をかけているところもあるんですけども、そこで一般書の市はそこで大きく扱いをしています。

それから火曜日は東京古典会と、先ほどの古典籍をここでやっております。扱っております。それから、洋書会、洋書をそこでやっぱり市会があってやっております。それから水曜日は資料会といって、雑誌のバックナンバーですとか学術書などを扱っております。それから、木曜日、一新会とあったんですが、これは今ちょっと事情があって中止になっていまして、金曜日に明治古典会といって、明治以降の日本の古典籍を主に扱っております。

そこに、本が並んでいるところに本屋が持ってくるわけですけど、それを今度は業者がまた入札していくと。それは神田だけじゃなしに都内の業者、あるいは年に何回か大市が開かれますが、そういうときは日本中の業者が入ってきて、そこで入札をしていくという場所になっておりまして。それの入札のやり方ですけども、そこの１４ページにありますように、そこに、札に値段を入れまして、それで札の高い人、一番高い人とは限らないんですが、に落札していくという形です。それが１４ページにございます。

それから、そのほかに、そこには本の扱い方ですとか、いろいろのことを幾つかのことが業者向けに書いてありますけども、今ですと、今どきですから、インターネットで入札していくというようなこともできるようになっておりまして、それからインターネットで古書組合として、今、「日本の古本屋」というサイトを経営しておりまして、それがやっぱり出来高のかなりを今占めておりまして、そういうことを協同組合としてやっております。

そういうふうなことで、まず協同組合をつくって、それを運営しているというのが東京の古本屋にとっては大きな位置づけになっていると思います。

それから、２９ページに「古書月報」と、これは毎月出している情報誌ですけど、お互いの情報をやり取りしていると。私どもは、うちの父が昭和９年に独立したときから「日本古書通信」という雑誌を出していまして、それも一つの情報誌として運営を今まで使ってもらっております。

それで、そういう古典、そういう市会があるということと、それから市会があることが、店員教育、あるいは二世の教育というものになって、つながっていっているというふうに思います。

それともう一つ、五つ目としては、千代田区でやっている古本まつりが今年で六十何回になりますけども、始まりのときから千代田区との共催ということになっていて、千代田区の行事の中で共催というのは古本まつりだけだというふうに聞いておりますけれども、区のほうでいろいろ助成を頂き、あるいはほかの地元の商店からバックアップをもらって、これだけ続いてきている。今はどこの地域へ行っても古本まつりというのは当たり前のようになっていますが、そういうことだという、千代田区から出発して今に続いているということだと思います。それがそこに書いてある五つ目、五つのことです。

この「神保町が好きだ！」の概要をざっと見ますと、ページの、目次がありますけども、目次がそこにありますように、それがそこの大きな流れを書いておりまして、それで、次の２ページから、江戸時代の本屋の風景ですとか、それから先ほどお話しした４ページにはアーネスト・サトウですとかなんかの肖像が出ておりまして、それから６ページにあります「東西書肆街考」と、これは脇村義太郎先生が神保町の歴史を岩波新書でまとめて、大変丹念にまとめていただいて、この本が出たために、その後も何人かの先生方に神保町の古書店について書いていただいておりまして、それは私たちの仕事を見直していく上で大きな支えになっております。

８ページを見ていただくと、これは明治２年にできた開成学校――東大の前身ですね、の建物です。その後の９ページにありますのは中央大学の前身の学校の風景です。それから１１ページにありますのは有斐閣。有斐閣は最初は古本屋なんです。あそこが一番本屋としては、神保町として一番最初だというふうに今のところ言われておりまして。ただ、有斐閣さんにしても資料がほとんど残っていないと言われるんですね。あったら、皆さん、お知らせいただければと思いますが、有斐閣さんが一番最初です。その次にできているのは明治１４年の三省堂。１２ページにあります三省堂ですね。三省堂は、幕臣なんですけど、明治大学のところにいたんですが、幕府が瓦解しまして一回静岡のほうに、引き上げるというか移ります。けどまた東京へ戻ってきて、麹町のほうで下駄屋をするんですけど、火災に遭いまして、それでまた今度は、またじゃなくて、それで神保町に来て本屋を始めるということで、そこら辺のいろいろなことが物語は今でも残っておりますので、ご興味ある方はご覧になったらと思います。そのほかに丸善ですとか、あるいは、なんかも神保町で最初店を出します。

そのほかにも幾つかのところが神保町で店を出すんですけども、それが現在につながってきて、いろんな店が、例えばそこに、２０ページにあります大雲堂、これは東条書店という大きな古本屋があったんですけど、その流れであって、その東条書店はなくなってしまっていますが、大雲堂というのは現在でも残っておりまして、その後に出てきたのが一誠堂書店です。その間に、例えば２５ページに髙山さんのお店が出ていますけど、その次の２６ページに一誠堂が出ております。一誠堂は越後の出身でして、そこから出た本屋というのは、私どももそうですけども、神保町でも今十数軒ありまして、日本で見ればたくさんの一誠堂出身者というのがおります。その一誠堂が出ております。

あるいはその次の２７ページ、これは昔の市場の光景です。市場はこういうように座敷に座って市場をやっていたという写真ですね。

それから、３２ページにありますのは、これは現在の一誠堂です。一誠堂の店が、あれは鉄筋コンクリートで、昭和４年ですか、５年かなんかにできた古い店です。その後で、３５ページにありますのが、神保町が戦災に遭うんですけども、先ほどお話でもしましたように、ここに、赤いところが燃えているんですが、神保町の駿河台下から神保町にかけてのところが焼け残りまして、それでそのために現在の神保町が残っているということだろうと思います。

私ども、３８ページにありますように、商売は店だけの商売じゃなしに、古書の目録での商売で全国で商いをさせてもらっています。

それで、４１ページにありますが、これが、ここで遠山区長が挨拶を受けておられるのが第１回の古本まつりです。第１回から千代田区との共催ということでやらせていただいていまして、その下にある写真は、現在の三菱銀行があるところでして、波多野巌松堂という大きな古本屋があったんですが、そこの波多野さんのところが空き地になって、そこを使わせてもらって、古本まつりとしては一番盛大な古書店だったと思いますけども、そのときやらせてもらっています。主体は大体岩波さんの空き地、岩波さんのところを使わせてもらっていました。その後、今は区道を使わせてもらって古本まつりを行っております。

それで、あと４３ページ、これは戦後立て直したときの古書会館です。ただ、設計、本というのは重たいものですから、建てて使っているうちに床が曲がってきまして、鉛筆がごろごろ落ちていっちゃうんですよね。それで建て直さなきゃいけないということで、建て直しをいた

しまして、それで現在の建物に、４７ページにある建物になっております。その４７ページの上にあるのが、上が戦前に建てた建物、それから左側が戦後建て直して一時的にあった建物です。その後が先ほどの鉛筆が転がっていたという、鉄筋コンクリートの建物なんですが、その後建て直したのが現在の古書会館になっております。

そんな流れで神保町が現在につながっておりまして、今後私ども、いろいろ浮き沈みがありますけども、みんなで協同組合として力を合わせてやっていくということになるかと思います。

時間が、こういうことで終わらせていただきたいなと思います。（発言する者あり）あと髙山さんにつなげますんで。お願いいたします。

〇髙山氏　弱ったな。はい。

〇小枝委員長　八木さん、ありがとうございました。大分駆け足でお話を頂きましたので、時間的には少し余裕がありますが、引き続き髙山さんのほうからお話を頂いて、そしてまた、もう少しお話し足りないこともあったら、また八木さんのほうからもお話しいただけたらと思います。

では、髙山さん、よろしくお願いします。

〇髙山氏　はい。皆さん、こんにちは。今日はこのような機会をつくっていただいて、本当にありがたく思っております。

これからの神保町古書店街の課題というのは、もう、ちょっといろんなところで僕も話をして、聞いてくれよということで、議員の皆さんにも、また役所の皆さんにもお話をして、悩みを話しているんで、聞いているよという方も多いかなと思いますけれども、お許しを頂きたいなと思っています。また、八木さんの話とちょっと重なるところもありますけれども、ご容赦を頂きたいなと思っております。

まず、せっかく八木さんとこうやって並んだものですから、八木さんとの関係を、ちょっと欄外ですけどもお話をしたいなと思っています。

うちの初代というのが九州の久留米で創業したんですね。それで、うちの母親の話だと明治８年に久留米で創業して、いろいろ資料で見ると、多分、明治３０年ぐらいには神保町に出てきたんだと思います。そのときにうちの初代の髙山清次郎が、うちの祖父の髙山清太郎を連れて神保町に来たと。それで結婚して子どもが生まれるんですけども、娘が１人しか生まれないのね。それで、これはもう養子をもらわなくちゃいけないといって、そのときに探したのが、八木さんの八木書店に勤めていた店員が実は僕の父親なんです。だから八木さんとはもう本当に親子関係みたいな関係で、八木書店で勤めていた――そのときは伊沢富三男といっていたんですけども、がうちの祖父がもうぜひ髙山家に養子に来てくれということで、うちの、僕の母親の一人娘と結婚して、僕が生まれたということなんです。八木さんとはだからそういうことで、もう本当に長いお付き合いで、大学も立教で先輩ということもあるんですけども、本当に仲よくやっています。

こういう、このこれだけと限らず、神保町の古書店というのは、もう親戚関係とかがすごく密なんですね、後でまた話しますけども。そういう村みたいな、そういう関係でこの１５０年やってきたということを、まず知っていただきたいなと思っております。

ということで、私は４代目、先ほどご紹介がありましたけど私が４代目で、私の息子が、５０代になる息子が５代目で、一緒に、今、古書店を経営しております。

古書店の誰もがそう思っていると思いますけれども、神保町の古書店は、１軒だけでやっていてもお客さんが来ないんじゃないかなと、みんな思っております。今、八木さんからもご紹介がありましたけど、１３０件が軒を並べてやっている。こういうところが神保町の古書店街の強みだと思っております。

私も店に、ここのところ大体店にいるんですけどね。店にいると、お客さんというのはなかなか難しい本、なかなか見つからない本を探しに来るんですね、大体神保町の古書店というのは。で、こういう本はありますかといって、うちでない本もよく尋ねられるんですけども、そうすると、さっきみんな見ていただいたあの古書店地図帳、これでご案内をして、例えば将棋の本なんて、将棋の専門店ってあるんですよ。それで見たら分かるんですけど。珍しいでしょう。将棋と碁の専門の古書店というのがある。そういうところをご紹介するし、それから建築関係といって、ここのところ外国の人も含めて建築関係ってすごくお尋ねの人が多いんですけども、建築関係も建築専門店があるんですね、古書店で。そういうのも古書店地図帳に載っているんで、ご紹介をすると。

まあ、お互いさまで、そうやって１３０軒の古書店がお互いに紹介をし合って、できるだけ神保町に来たお客さんががっかりしないで、何とか難しい本でも見つけて帰れるような仕組み、仕組みというか、皆さんはそういうマインドでやっているんで、それが、もちろんさっきハ木さんのお話にもありましたけれども、古書会館の中でみんなで取引しているというところもあるんですけども、非常に古書店街の皆さん、それぞれのお店の関係がすごく密なんですね。本当に仲よくやっているところなんだろうなと思っております。２代、３代と本当に親戚のように、隣り合わせで仲よく商売をしてきている。そんな雰囲気があるまちだと思っております。

さて、まちづくりの課題というのは、自分のことにならないとなかなか見えてこないんだろうなと思っております。今、靖国通りの私の店がある古書センターは、今から５０年前に共同ビル化をする提案を、私のところと、この隣の北澤さんともずっと長く仲よくしているんですけども、隣の北澤書店と私が中心になって、当時木造の５軒長屋だった皆さんに働きかけをしてまいりました。当時、震災から約５０年、また都営地下鉄線の新宿線ですね、新宿線の工事が昭和４６年から始まりまして、結果的には５５年の開通まで約１０年かかった大工事になりました。当時は開削工法といって、木造家屋の軒先まで地中深く掘り進んだものですから、本当に安普請の長屋は、毎日毎日、倒れるんじゃないかという心配するほど大きな影響を受けてきました。

これで、これは区議会のほうにも、古書店街というか靖国通りの商店街が一緒になって陳情に行ったんですね。ちょっと横道の話になりますけれども、これを、都営の交通局の人を呼んで、みんなで説明会をしたときに、地図を都営のほうで、都のほうで用意したんですね。それで、紙が伏せてあったところを、ある人がはぐったらしいんですよ。そしたら高速道路の基盤が出てきたというんで、これで大騒ぎになって、最初は開削工法反対という運動していたんですけども、その後、高架高速道路建設反対というのに切り替えて、これでやっぱり１年ぐらいデモをしたりしたんですよ、神保町の古書店中心に。そのみんなで反対運動をしたのが、今、靖国通り商店街連合会という、そういう一つのまとまりの基盤になったんです。

そんなことで１０年間ぐらいかかって、今申し上げたとおり昭和５５年に開通して、これは新宿線、それまで都営三田線しか、神保町の駅ってなかったんだよね。すごく新宿線、その後

にできる半蔵門線ということで、今、神保町に３駅入っていますけども、その地下鉄ができたことはありがたかったんですけども、でも、今でも高速道路建設の反対をしたのは、これはよかったなといって語りぐさになっている。本当に靖国通りに高速道路が上に乗ってきちゃったら、もう本当に大変なことになっていたろうなと思っています。ちょっと横道の話になりましたけども。

それで、結果的に都営地下鉄の開削工法で、木造、当時木造の家が多かったんですね。申し上げたとおり、昭和５０年というのは、関東大震災から約５０年たっているわけなんで、関東大震災の後すぐに造ったもう安普請の木造の家ばっかりだったところに、地下鉄の工事が入ったということで、それが契機になって共同ビル化したというケースが、うちだけじゃなくて、ほかにもあったんじゃないかなと思っています。

それで、ちょうどうちの前の工区が、五洋建設という建設屋さんが、建築会社がやっていたんですけども、そこの工事長がよくうちに直しに来ていたものですから、結果的に五洋建設で古書センターというのを共同ビルにしました。５３年２月に古書センターを建てました。それが今年で４５年になります。

旧耐震、多分、旧耐震と新耐震の切れ目というのが昭和５７年、５８年の辺りだなというふうに聞いているんで、関東大震災から今年で１００年ということを考えると、大体、関東大震災の後に造って５０年、それを建て直してまた５０年というのが、ちょうど今の神保町のまちのありようなんだろうなと思っています。当然、旧耐震になるんで、うちだけじゃなくて、これからどうもこの神保町の古書店街だけじゃなくて、靖国通りに面しているところは、うちだけじゃなくて、これからどうしようと。旧耐震、震災が来るよという話はもう繰り返されているんで、これはもう１０年ぐらいの間にはもう一回ビルを建て直さなくちゃいけないなというのは、我々にずっと重くのしかかっているんですね。

じゃあ、うちは共同ビル化していますけども、じゃあ単独で１軒ずつのお店がやれるかというと、これは八木さんも一緒に勉強したんですけども、明治大学の田村先生という方が、これからの神保町のまちづくりの課題ということで講演をされて、勉強会をやって、それでいろんなシミュレーションをしてもらったんですけども、例えば２０坪とか２５坪ぐらいの敷地のビルを靖国通りで建築すると。もう今また高騰していますからね、建築費が。そのときでも例えば容積７００％なんで、２５坪、９階建てぐらいの建物を建てて、１階に自分の店が入る。で、上を貸すというシミュレーションすると、これね、６０年たっても、もう採算が合わないというんですね。だからこれは、うちだけじゃなくて、これからのところでどうしても、この神保町の古書店街だけじゃなくて、今お店をやっている事業所を中心に考えると、この共同化せざるを得ないんですね。

再開発で幾つもいろんなことが進んでいます。再開発はこれはこれで、本当言うと羨ましいなと思っています。デベロッパーさんがいろいろ計画をつくってくれて、いろんな補助金も入るんですけども、ところが例えば５軒ぐらいで、今うちの古書センターの一画を、二丁目３番地街区を、大体３００坪ぐらいになるんですけれども、３００坪ぐらいのこの二丁目３番地の街区を共同化しようという話を持ちかけて、８割方の人がテーブルに今ついているんですけども、その中で、もちろん今の建築費の高騰というのが一番大きいんですけども、それと並んで、２００坪、３００坪ぐらいのビルにしたときに、駐車場を造らなくちゃいけないんですね。こ

れが、東京都の附置義務になるんでしょうけども、駐車場を、この当然駐車場というのは入り口が路面に面していますから、４メーター、５メーターぐらいの開口部を路面に造って、それで入るとなると、その分お店屋さんがなくなっちゃうんですね。お店屋さんが並んでいるところを束ねてやろうというときに、路面のお店屋さんが２軒分ぐらい駐車場のためになくなっちゃう。非常に不合理な話だなと思っています。

近隣でいろいろ駐車場の需要というのを聞くと、ビルの中にある駐車場はほとんど空いているんですね。これは再開発の中でも空いているというふうに聞いていますので、路面のタイムズだとかリパークなんかでやっているところは、えらい高い金額でやっているんで、あれも一時的に空き地になっているからやっているようなもので、なかなか機械式の駐車場を造るとなると、これ、駐車場に見合う、また管理費に見合うというビジネスモデルが、これは見えてこないんですね。だからこの駐車場附置をぜひ、いろんなところで僕も話をして、また、またかと思われるかもしれないですけれども、ぜひ役所の皆さんにもお話をして、今少し考えてくれているのかなと思いますけども、ぜひこの問題は東京都と諮っていただいて、駐車場のためにせっかくの路面のお店がなくなっちゃうというのは、本当にもったいないことだなと思っています。

車というのは、昔は、５０年ぐらい前は、私のところで本を買ってくれると、世田谷に届けてくれというと、うちの車で運んだんですね。これはもう半日かかって世田谷まで百科事典なんかを運んだこともあるんですけども。今、もうご案内のとおり宅急便が全部引き受けてくれるんで、お客さんも宅急便の運賃というのを出してくれるんで、もう何でも宅急便にお願いしてやるということで、もうほとんどうちも車でどこかへ配達するということはほとんどなくなっちゃった。事さようにほかのお店もそうですし、それから今申し上げたとおり地下鉄が３線入っていますので、今、神保町は、これからの中で、車がなくても十分皆さんご商売ができるんじゃないかなと思っていますので、この駐車場の問題はぜひ区議会の皆さんにもご理解を頂いて、一つ前に進めていっていただきたいなと思っています。

それと、靖国通りを見回して、神保町かいわいは比較的まだお店が残っているほうなんですけども、これ、靖国通り全体で見ると、何しろお店が減っちゃっているんですね。商店街、靖国通りは１４の、昔はもう少し商店街はあったんですけれども、今、靖国通り商店街連合会の加盟の商店街は少なくなっちゃって、もう商店街を畳むというところも出てきちゃったぐらいで、オフィスだとか、それからマンションに、新しい、共同ビル化だけじゃないでしょうけども、２００坪ぐらいのビルというと全部オフィスになったり、全部マンションになっちゃったりしちゃうんですね。

これを何とか、やっぱり路面は商店に、まあ本屋にはなってもらいたいんですけど、神保町は。だけど本屋だけというわけにいかないでしょうから、従前からやっているお店屋さんが残れるような、これを何とかできないかなと思っています。そうしないとやっぱり、神保町と限らないですよ、神田全体で見てもいいんですけども、本当に魅力が、まちの魅力がなくなっちゃうと思いますね。やっぱり活気とにぎわいのあるまちというのを、当然、商店会長なんで目指しているわけで、ところが今申し上げたとおり、ビジネスモデルとしてなかなかこの商店が路面に残りにくい環境がどんどんどんどん出てきちゃって、この先、千代田区の魅力が本当になくなっていっちゃうと思うんですね。

これはなかなか難しい問題なんでしょうけども、ぜひ何か知恵を絞って、新しいビルの１階にはお店屋さんが残っていく。できれば従前からある、まちの伝統とか文化に寄り添ったお店屋さんが出てくるような一つ施策を、区と議会の皆さんと相談をしながらやっていっていただきたいなと思っております。

まだ、いいですか。大丈夫かな。もうあれかな。

直近で、ちょっと一つ。皆さん知っているとおり、池袋の西武百貨店。西武百貨店がね、前の高野さんという区長は亡くなっちゃったけども、高野さんって、また余計な話なんですが、高野さんも古本屋さんだったんです、昔はね。古書店から都議会議員になって、それで区長になったんですけども、高野区長が、池袋の西武が、まあ西武自体もあんまり振るわなかったんでしょうけども、一、二階をヨドバシカメラにするといったときに、これに待ったをかけたんですね、区役所が。こういう例は僕は今まであんまり聞いたことはないですね。行政が業態とか業種に対して口を挟むというのは、なかなか今までなかったんです。ハードの部分は当然指導だとかいろんなものが入りますけども、業態とか業種に対して行政がこれにしろというのはなかったんですけどね。

でも、これをやっていかないと、まちは本当に、何というかな、そういうお金だけの話で変わっていっちゃいますので、何とか、僕は商店というのは文化だと思うんですね。商店が残っていくというのは。商業は文化だと思っているんで、行政もその辺り、ぜひお店屋さんが、従前からあるまちのよさというのが残るような、そういう指導というか、かじ取りを、ぜひ行政が中心になってしていただきたいなと。これも議会の皆さんと一緒に後押ししていただいて、千代田区の魅力が残るような、そういう施策、かじ取りをしていただきたいなと思っております。

神保町の書店街、小川町のスポーツ店街、また楽器店街、そして少しずつ変化をしておりますが、秋葉原の電気街と、まちのありようとたたずまいは本当にまちの文化だと思っております。髙山本店の私どものお得意さんだった司馬遼太郎先生の著書「街道をゆく　神田界隈」、これ、今日持ってきたんですけども、この「神田界隈」の中に「神田界隈は、世界でも有数な（あるいは世界一の）物学びのまちといっていい」との一節があります。日本を代表する大学、学校、そして一緒に発展をしてきた古書店、出版社、文字どおり神田神保町は物学びのまちです。自分も古書店の跡継ぎの皆さんと、これからも神保町の本のまちを守っていく誇りと覚悟を持って訴えてまいりたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

（拍手）

○小枝委員長　髙山さん、八木さん、大変貴重なお話を、本当に重みのあるお話をありがとうございました。大変駆け足でお話も頂いたことで、あと３０分ぐらいの時間が残っております。委員の皆さんにも、いろいろ聞いてみたいこと、確認してみたいことなどもあると思いますので、今日お話しいただいた「古書と神保町１５０年―神田神保町はいかにして「古書の聖地」となったか」というこの八木さんのお話、そして髙山さんのほうからは、この歴史を、文化を継承していくための様々な、かなり幅広なところのリアルなお話を頂いたと思っています。この委員会は、髙山さん、実はソフトのほうしか今担当しておりませんで、まだハードのほうは。ただ、議員一人一人の中にはしっかりと、日頃耳にしている課題としても、駐車場の問題、ま

ちづくりの問題、確かにそこと、ハード、ソフトを兼ね合わせていかなければ、この文化は継承されないということも非常に心底リアルに分かったのではないかというふうに思います。
　それでは、委員の皆さんから、感想も含め、あるいはこうしたところを確認したいというようなことがありましたら。私もありますけれども、皆様のほうを優先したいと思いますので、どうぞお手を挙げていただけたらと思います。いかがでしょうか。
○大坂委員　貴重なお話を本当にありがとうございました。まさにやはり積み重ねた歴史の重さというものが、本当にひしひしと直接伝わってくる、すばらしい、いい話だったなというふうに思って聞きました。
　古書店は１３０年、１５０年続いているというところで、私も千代田区で生まれ育って、出版のまちが神保町だったじゃないですか。うちは製本街で生まれ育って、工場で本当に子どもの頃は遊んでいたんですけれども、もう３０年前にその工場は全部なくなってしまったということも経験している中で、やはり残していくということはすごく大変なんだなというと同時に、すごく羨ましいなと思いながら聞かせていただきました。
　そうした中で、お話の中で、まち全体が古書店同士助け合うというか、そういったマインドがずっと続いてきているというような話がありましたけれども、このマインドというのが、そもそも一番最初の頃からそういう、神保町の皆さんというのはそういう気質があるのかもしれないですけれども、最初からあったのか、それとも年々積み重ねてくるうちにそういうものが醸成されてきたのか、もしくは皆さんの中で何かそれをもっともっと発展させていくための取組をしてきたのかというところがもしあれば、お聞かせいただければなと思います。
○八木氏　古本屋の場合は、さっきお話ししたように市場がありまして、それは職員はいるんですけど、職員はお金の計算をするだけで、本を受け入れて、それを仕分していくと。みんなが特色を持っているように分けていくということは、業者がみんなやっているんですね。それと同時に業者自身は本の勉強をお互いの中でしていくということをずっと暦年やってきていまして、そういうことが、私は、今、古本屋はお互い同士が力を合わせていくということなんだろうなと思っています。
　多分それは、先ほどお話ししましたように大正に古書会館ができたと。あれはすごくみんなで共同出資して造ったわけなんですけども、あの時分にあれだけのものをできたということが一番大きなことだったろうなと。ですから、第二次世界大戦でもそれを乗り越えて現在につながって、古書組合ができて、古書組合で力を合わせているというのが大きいのかなと思っています。
　それで、先ほどお話で、大坂さんのところは製本だったんですか。
○大坂委員　製本工場です。
○八木氏　製本屋さんがあれだけあったのに、みんななくなっちゃって寂しいなと私なんかは思ったり、それから製本関係の業種が随分いろいろありましたですよね。それが神保町からみんななくなっていっちゃって。あれは都心に工場を造ることができなくなっちゃったということが大きかったというふうにも聞いていますけども、あれは神保町にとって大きなことですよね。と思います。
○髙山氏　ちょっと加えて、いいですか。
　八木さんから市場の話が出ました。私もあんまり真面目に古本屋をやっていない時期があっ

たものですから、でもちょっとこの古書店業界を俯瞰的に見てつくづくそう思うんですけども、市場というのは、なるべく本が高くなるようにみんながしむけるんですね。これは、古書がこういうふうに残ってきたということは、なるべくその本に価値を見いだそうというみんなのマインドがあるんですね。だからそれが僕は文化だと思うんですね。

これ、多分絵もそうだし、それから陶器でもそうなんでしょうけども、なるべくその物が高くなるような仕掛け、これは当然オークションでやれば高くなるわけなんで、みんなで古書の相場というのをつくっていこうという、そういうマインドがあるんですね。だからすばらしいものが出ると、やっぱり持ってきた業者がもう尊敬されるというかな、こんなすばらしいものが出てきたということで、みんなに注目してもらう。それがお互いの気持ちの中で、支え合っているというか、相場を維持していくという、そういうマインドが僕は市場の中で醸成されてきたんだろうなと。

それで、安くすればいいというんじゃなくて、なるべく古書の相場を上げようという、そういうマインドの中で市場が運営されてきたということが、僕は非常にみんなで古書の世界というか、古書の売買のこういうビジネスを盛り立てようというところが、みんな一緒になって、僕は古書の市場という中にあるのが、すごく古書店同士仲がいいというか、運命共同体みたいな、そういうところがあるんじゃないかなと思うのと。

それから今、僕はうちの店の上で生まれ育っていて、それでみんな、さっき申し上げたように長屋で、昔は１階が店で、２階にみんな住んでいたんです。一家中が寝泊まりしていたのね。だから当然、錦華小学校へ行くときもみんな誘い合って、古書店のところから登校して錦華小学校へ行ったりしているんで、もう本当にね、みんな、村みたいな生活をしてきたというところもあるのかなと思います、そこはね。

そこの名残はもう本当にあって、僕なんかもちょっと前までは「肇ちゃん」と呼ばれていて、みんな「〇〇ちゃん」「〇〇ちゃん」と言って、今でも「〇〇ちゃん」と言っているぐらいなんで、そういう一緒になってまちの中にいながら育ってきたというところももう一つあるかもしれないね、そこもね。

〇大坂委員　ありがとうございます。

〇小枝委員長　はい。ありがとうございます。

あと、どなたかありますか。

〇のざわ委員　すみません。委員長、のざわ哲夫です。すみません。せっかくの機会ですので、ぜひ質問させてください。

宣伝じゃないんですけど、私は日本維新の会の区議会議員で、非常に都議会議員は少ないんですけど、国会議員が衆議院で４９ぐらいいまして、非常に近い関係にあるというのもありまして、実はこの問題じゃないんですけど、ある問題、なかなか区役所のほうが東京都のルールに縛られているんで、ちょっとある協会のほうに行きましたら、こういうふうな法律改正をしたらどうだという話があったんで、１回それをやってみたいなと思って、これ、もしちゃんといって、もう法律とか都条例、区条例の新旧対照表まで作ってもらった形までできたら、１回提案してみたいなと思っているようなことで、今回の一般質問からちょっと、よく東京都と、国と都と区が一体となったら千代田区はよくなりますよと選挙で言っているんですけど、それをちょっと、やれるかどうか分からないんですけど、やってみたいという中で、ちょっと今お

話がありました。
　一つは、ちょっと先に髙山会長の駐車場のところで、１階の路面店が駐車場の、ちょっと私もよく分からなくて、間違ったら申し訳ないんですけど、１階の路面店がなくならないような、それも文化だから、そういうのも残してくれるような取組をしていただきたいという中で、東京都と相談して、駐車場の問題と何とかかんとかというお話があったんですけど、このここの、まあ開発になるのかどうかよく分からないですけど、そういうのはもう皆さんは賛成されている状況なのかどうかとか、そういうのを都に進めていって、ほかの方から、ちょっと日本テレビとか、外神田でみたいに、わあっ、みたいな形で反対が出ないような状況にあるようでしたら、ぜひ力をかけてお手伝いをさせていただきたいなというふうに、今ちょっと、今、瞬間思っただけで、できるかどうかは別なんですけど、そこら辺を今後また教えていただきたいなというのが１点と。
　あと、八木様のほうは、ちょうど今、国会図書館とかが簡単にコピーをされちゃって困ると。私もかなり使わせていただいて心が痛いんですけど。いいかどうか分からないんですけど、例えばこんな古本屋組合様の方がいて、相当いろんな知識、ノウハウがあるんで、こういう法改正とか、こんなのがもしできるんだったら、時代の流れの中でいいことじゃないかみたいなことがあったら、ぜひ、できるかどうか分からないんですけど、宿題として頂けたらというのが２点目なんですけど。
　あともう一つ、最後に、今日は古本屋、古書店のお話なんですけど、先日、髙山会長のお話を伺って、髙山会長のビルはいろんなお店を入れていらっしゃるということで、「ボンディ」さんというのが僕、びっくりしたんですけど、ご長男が経営されて、ちょっと違ったかも、そういうふうに聞こえたんですけど。
〇髙山氏　えっ、何と。
〇のざわ委員　ご長男かなんか。
〇髙山氏　ええ、長男と２人で。
〇のざわ委員　経営されているというふうに聞いて、あれだけいろんなお店をやって、あそこのビルに集客ができるのは、ちょっとこれ、かなりもう天才的な個人の才能だと思うんですけど、この神田を見るときには、そういういろんなお店を入れましょうという考え方なのか、それともやっぱりこれだけの、ここに本、古書の方々がいらっしゃるんで、その特徴を、本当は両方なのかもしれないですけど、を今お話があったような古書の価格を伸ばすような、何かそういう考え方をするのか、どっちのほうが、両方なのかもしれないですけど、そういうのをもし教えていただけたらというふうに思ったのと。
　あと、そう、今思い出したんですけど、最後に、古本の値段を上げようというのは、例えばワインとかいろんな切手とか、いろんなことがあるんですけど、すみません、この古本の値段を上げるのに一番参考になるような商品みたいなのがあったら、こういうのが似ているよみたいなのがもしあったら、教えていただきたいと。
　すみません。四つになっちゃったんですけど、どうぞよろしくお願いいたします。
〇小枝委員長　はい。たくさんお話がありました。勉強会なので答えられるところと答えられないところがあると思いますけれども、お話しいただけるところがあれば、東京都や国の法律を改正して、もっとより改善することができるような何かはないかとか、あるいは路面店が連

なるように、どういうふうにまちづくりを進めていったらいいのかという話だったと思うんです。ここはまだハードのことはやらない委員会ではありますけども、まちではそれは、勉強会としては関係ないと思いますので、差し障りのないところをぜひ率直にお話しいただけたらなというふうに。今の質問で分かったところがあればなんですけど。

お願いいたします。

○髙山氏　はい。ありがとうございます。心配をしていただいて、ありがたいなと思っています。

駐車場はこれ、都条例というのは多分これだけじゃないと思うんですね。東京都一律にこういうふうにルールをかけていると、やっぱり２３区だけ見てもそれぞれ地域性が違うんでしょうね。だから千代田区の中だけで見ても、やっぱり車がなくちゃというところもあるでしょうし、車がなくても、公共交通もあるし、またさっき申し上げたように十分宅急便なんかでカバーできるというところもありますし。よく田舎のまちに行くと本当に車がないともう何もできないというところもあるんで、事さようにそれぞれの地域の中でのやっぱりニーズというのがあるんで、その辺りは、僕が申し上げているのは、僕の周りで話をするとすごくそのとおりだと言ってくる人が多いんで、僕も意を強くしてこういうところでお話をしているんですけども、これは、もしもこの先踏み出すとすれば、やはりちゃんとした調査を区でしていただいて、需給のバランスを、駐車場の需給のバランスをよく確かめた上で、これは前に行かなくちゃいけないなと思っています。

これはちょっとまた余談になっちゃうんですけども、この間この話をデベロッパーの人と話したら、もう近い将来、タワーの機械式駐車場は、これは電気自動車の波が来るともうほとんど使い物にならないというんですよね。路面だと電気を充電できるんですけども、機械式駐車場の中で、今の技術で、入っている間に例えば充電ができるかというと、なかなか難しいだろうと。だから将来的には機械式駐車場はほとんどこれ、使う人がいなくなっちゃうというような話も、僕がこういう話をしたからしてくれたんだろうけども、まあそうだろうなと思っているんで。

何しろここでやっぱり今のビルの中にある駐車場、これはちょっと考えないといけないだろうなと。繰り返しになりますけども、やっぱりそれぞれの地域の地域性があるんで、そこの辺りはよく役所のほうも調査をしてやっていってもらいたいなと思っています。

もう一つ、古書センターの云々という話があったんで、古書センターは本当に僕が５０年前にやるときに、最初提案は、ゼネコンさんの提案は、北澤書店と髙山本店と１階にお店をやって、上をオフィスビルにしたらどうかという提案だったんですね。普通だとそういうふうに提案してくるでしょうね。で、これじゃ、まちの発展にそぐわないなと思ったんですね。うちと北澤さんが、元あったよりちっちゃくなっちゃうんですね、当然ながら。１階、北澤書店と髙山本店と並んでいるところを壊して共同ビル化するわけですから、それはもう面白くないなと思ったのと、だから、神田古書センターという名前をつけちゃったんですね。

それで、古書店を呼び込もうと。結果的に大阪からも、いろんなところからも入ってきて、当時スタートしたときは、ほぼほぼ９割方全部古書店のビルだったんですね。そこからいろんな、時代が変わって。この４５年の中で。でも、なかなか、自分で言うとちょっと自慢になるんですけども、面白いお店が入っているなと思って、それはちょっと最初のところでお話しし

なかったんだけども、家賃をあんまり高くし過ぎちゃうと面白い店が入らないんですよ。やっぱり貸すほうで、こういうお店があったらいいなということを、自分、その貸すほうがよく考えて、そして安くても入ってもらえば、それはまちとしてプラスになるだろうというふうに考えてやっぱりビルの運営をしていかないとね。これはだから、うちの古書センターだけじゃないですよ。これから建て替えをしていくところも、家賃の問題というのは大きなポイントなんですね。

これ、今新しくできたところの１階って、靖国通りで言うと坪４万円から５万円ぐらいするのね。これじゃ従前からあるお店屋さんは入れない。コンビニとかファーストフードとか、ナショナルブランドのお店しか入らない。これじゃ、ちょっとまちとしてのポリシーがなくなっちゃうだろうなと。だからそこのところは、これからどうやって、僕は自分としては路面で２万円と思っているのね。だから２０坪で４０万円。このくらいなら古書店も入れるだろうし、従前からあるお店がやっていこうということで入れるんだけど、２０坪で５万円というと１００万でしょう。２０坪で１００万の家賃というのは、なかなか、今、じゃあ今あるお店が入れるかというと、難しいね。

だから、その辺りも、どういうふうにそれを、家賃の問題を克服して、まちのありようというのを目指すものにしていくかというのは、これも僕は課題だと思います。それが国とか都がどういうふうにできるか、その辺りも。でもそれを、それを何とか乗り越えないと、まちが荒れるというか、家賃だけの採算でビルが動いていっちゃうと、これはどうかなと思いますけどね。

○小枝委員長　はい。ありがとうございます。

それでは、ちょっと私のほうから一つ、二つ、申し訳ありません。今日のようなお話が、古書店の方々、お話しして、本当にかけがえのないお話を頂くわけですけども、これ、中央区なんかだとアーカイブみたいな形で、ここに行けば子どもたちもこの話が聞けるというところがあったりするんですよね。

例えば千代田区、学校が今度できますけれども、その学校の校内に、本のまちの学校でも、そういうふうな歴史を子どもたちが学ぶようなコーナーができていなかったり、それは自分も反省しつつなんですけれども、あるいは再開発も一画で進んでおりますけども、そういった中にも、そうした何というんですかね、歴史館みたいなところが民間のコーナーにでもあれば、それは子どもたちがまた行けるところにもなっていくというようなことで、何というか、こうしたことを子どもたちに、お話として、この物語、１５０年の物語を、アーネスト・サトウの話から引き継いでいくような拠点が、私が知らないだけであるのか、ないとしたら造ったほうがいい、造りたいなというふうに思いますけれども、どうでしょうかということと。

あと、まちの案内人というのを各自治体でやっていますけれども、そういうのも区長とかが認定して、神保町を歩きながら、こんなまちなんですよと、ここにこういうことがあったんですよというようなお話もできるような、そうした拠点やつながりがあって引き継がれていったらいいのかなというふうに思いながら聞いておりまして、お答えを、ちょっと感想なんですけれども、お話を頂けないかなというふうに。

髙山さん。

○髙山氏　いいですか。

○小枝委員長　うん。はい。あと、八木さん。
○髙山氏　はい。ありがとうございます。本当にそういうものがあったらいいなと思っています。八木さんが実は事務局長で、僕が副事務局長で、神保町を元気にする会という組織をつくっているんです。古書店とそれから、この神保町を元気にする会が、その財源でこれを作っているんですけどね。もうどのくらい、１５年ぐらいになりますか。
○八木氏　そうですね。
○髙山氏　１５年ぐらいになるんですけども、そういう組織は本当に手弁当で、出版社の皆さんも会費を払ってくれているのね。それから古書店も払っていますし。そういう形での一つのよりどころみたいのをつくって、そういうところはやっているんですけども、なかなかこれも大変なんですね。費用もかかるし、事務局が事務局の経費は払えないんで、みんながもう本当に手弁当で持ち寄りでやっていて、ちょっと実はもう八木さんと頭を抱えているところなんですよ。神保町を元気にする会の行く末をね。まあ、神田の古書店連盟というのはもう割としっかりしているんで、動いているんですけども。
　だから僕は、再開発の中でエリアマネジメントというのがありますよね。僕はエリアマネジメントが、この先ですよ、これだけ、この間も聞いたら二十幾つも今再開発が千代田区の中でかかっているという中で、僕はエリアマネジメントのお仕事の中に、そういうまちの文化を継承していくような機能をお願いして、やはりどれくらい、財源的にどうなのか分からないですけども、でもやれる力があるんだろうと思うんで、やはりエリマネの中でそういう地域を、文化とかそういうものを担っていってもらいたいなと。
　そうじゃないと、もう本当に事務局も、八木さんと僕とでやっているんですけど、なかなか若手がまたつないでいってもらえないというところもありますし、組織としてはもう本当に、何度も申し上げるけど、手弁当でやっているんで、その辺りで、ちゃんとした見える形で、今後もサスティナブルで、こういう組織がやっていけるようなものをどこかで担っていってもらいたいなと。僕はエリマネがその役割を担ってくれるかなと思っているんで、この辺りも一度議会の中で、エリマネの役目みたいなのを話をしてもらうところがあるといいなと思っていますけどね。
○小枝委員長　はい。ありがとうございます。
　八木さんのほうからも、そうした、何でしょう、今日お話しいただいたようなことを子どもたちに引き継いでいくような人と場所と、そうした拠点みたいな、もしイメージがあればお話しいただけたらなというふうに思います。
○八木氏　はい。今、髙山さんから話がありましたけども、神保町を元気にする会、今、今日ご出席の野上さん、佐藤さんがボランティア的に随分いろいろやってもらっていまして、来年、できたら、野上さん、話をしていただけますかね。あれ、可能性はまだこれからですよね。
○小枝委員長　野上さん。お願いします。
○野上氏　突然すみません。（発言する者あり）
　神保町というのは、書店がたくさん、古書店がたくさんあるとか大学がたくさんあるというだけじゃなくて、文学者が、歴代の文豪たちが神保町に住んだり、それから神保町でいろいろなものを書いたり表現したりしてきているんで、そういう意味で、近代文学の骨幹をつくった、鴎外と、それから一葉と漱石、森鷗外、樋口一葉、夏目漱石と神保町というテーマでイベント

をやりたいということを、今、日本ペンクラブが企画して、神保町を元気にする会の主催でやりたいなということで進めているところなんです。

これには、ただ、講演とか何かだけじゃなくて、映像で表現するとともに、それからシンポジウムも現代作家たちに出てきてもらいながら、現代文学にどういうふうな影響を与えたかというようなことを、神保町でゆかりのある作家たちを中心にしながら話をしてもらおうかなというイベントを考えています。

つまり、やはり神保町というのは古書店がたくさんあるということ、それから大学がたくさんあるということとともに、日本の近代文学あるいは近代の文化をつくってきた拠点でもあるということでありますし、それから世界にもこういったエリアというのはほとんどない。ロンドンの古書店街なんかを見ましたけれども、充実はしていますけれども、やっぱり規模から言ったら神保町に比べたら全然少ないし、世界各国でそういうものがたくさんあると言われていますけれども、やっぱり神保町は世界に誇る古書店街でありますし、それからやっぱり日本の文化の誕生の起点になったエリアなんじゃないかなということを、やっぱりフィーチャーしていきたいなと思っています。

○小枝委員長　はい。ありがとうございます。

○八木氏　どうもありがとうございます。それはまた私たちのほうで区のほうにもお願いしたいなと思っているんですけども、各地方のいろんなまちでそういうことを企画したときに、バックアップをしてもらっていましてね。ぜひ。

それで神保町の場合は古書店と、もう一つは出版社がすごく多いんです。そりゃ小学館、集英社と大きなところがありますけども、中小の出版社が多くて、私どもはある意味で出版関係の数をカウントしたときは、五、六年前だと５００ぐらいあるんですね。それで、そういう出版社を１人、２人でやっているという人たちが結構いまして、そういう人たちもぜひ神保町で仕事を続けられればなと思っていますので、またいろいろご相談させてもらいたいと思います。

○小枝委員長　はい。

○野上氏　ちょっと説明、補足しますけれども、ペンクラブでやっているのは「ふるさとと文学」ということで、最初は日本ペンクラブをつくった島崎藤村が初代の会長なんで、藤村と小諸ということで小諸でイベントを行ったことがあります。それをはじめとして、今回でもう１０回目になるんですけれども、それぞれのふるさとと文学者とを通じて、エリア、地域での文化的な伝統とか文学的な伝統を若い世代に継承していこうという企画の一つです。ということで、よろしくお願いします。

○小枝委員長　はい。ありがとうございます。

後先になりましたけれども、ただいまお話しいただきました方、野上先生ですね。

○野上氏　はい。

○小枝委員長　文芸評論家ということ、この「神保町が好きだ！」の、この冊子をお書きいただいた方でいらっしゃいます。どうもありがとうございました。

まだまだお話も聞きたいところでございますけれども、時間が参りました。髙山先生、髙山さん、八木さんに、お礼の拍手をもって今日の勉強会は終わらせていただきたいと思います。本当にありがとうございました。

（拍手）

〇小枝委員長　どうもありがとうございます。短い時間ではありましたけれども、本当に中身の濃い話を頂きまして、委員一同、いろいろなこの今日頂いた話をしっかりと受け止めながら、私たち委員会として、また何ができるのか、理事者の皆さんともぜひお話し合いを重ねながら、できることを考えていきたいと思っております。本当に今日はありがとうございました。

　これをもちまして、勉強会は一旦終了させていただきます。皆さん、よろしいですか。ありがとうございました。

委員会資料　2-1
令和６年10月７日

令和６年７月３日　講師　小藤田正夫氏（元千代田区職員）
テーマ　『震災１０１年と桜の継承』

１　講演概要

・１０１年前の靖国神社の風景
震災直後１３日目には、仮設住宅をつくり、公衆浴場も保育園もできた。
春には満開の桜（そめいよしの）が咲く。境内の桜が満開となって、被災した人々に勇気を与えた。
・「明治の桜」「維新の桜」が開花した。これを植えたのは木戸孝允（桂小五郎・長州藩士）。現、九段高校のところに屋敷があった。
・木戸は染井村（豊島区駒込）に別荘があり、江戸後期に植木職人によって誕生したクローン（接ぎ木）なので、山桜とちがって、若木でも花をつけ、同時期に一斉に花が咲く。
・招魂社（かつて、靖国神社は招魂社といった。明治２年戊辰戦争で亡くなった人の御霊を祭る維新を象徴するところ。）本殿の竣工時に桜や梅を植えた。
・斎藤月岑の「江戸名所図会」には、この地に大名や旗本の乗馬や弓の稽古場があった。
・昭和館のところには「番所調書」（幕府直轄の洋学研究所）があり、将軍に謁見のため、ハリスが逗留し、乗馬し、ここからは美しい江戸の全景が一望できると記録されている。
・木戸など長州人が学んだ「斎藤弥九郎の道場」があった。
・江戸城が将軍の居城だった時代は、石垣にものり面にも気は植えない。隠れる場所はつくらない。道路に樹木は植えない。
・当時の神社の創りかた。招魂社の維持費を出すために周辺の土地を貸して、店賃をとる。「盛り場」や「茶屋」をつくり、神田から表参道に来る道、千鳥ヶ淵からの道から、人々が来られるように交通を整備する。花火をあげ、競馬・お相撲・菊花壇など行う。
・木戸は九段坂にも桜を植えた。（明治５年の英字新聞写真）
・九段坂は、神社への表参道。九段下から招魂社本殿まで桜と灯篭に導かれる。
・九段には、山形有朋、大隈重信（現在の区役所）の居宅もあった。
・甲武鉄道（現在の外堀をとおる総武線）に風致の為に桜を植える。
・明治１２年より招魂社は靖国神社に。
・明治２４年から２年で、５２０本の桜と楓５０本を植えた。（靖国神社史）
・明治２８年駐日英国大使に任命されたアーネストサトウは公使館前に桜を植える。
・明治３０年代、路面電車が走るようになり、明治４０年代には、空を覆うような桜の林になる。路面電車で花見ができた。
・大正になって、まっすぐ伸びて円錐形のイチョウが「崇高の念抱かしける」と植えられる。本郷の東京帝大、東京駅前行幸通り、神宮外苑、国会議事堂前もイチョウ並木に。
・１０１年前の関東大震災、三崎町から神保町、低地帯の被害がひどかった。坂の上の靖国

神社の「復興桜」に見守られ、３月３１日で避難所は解散になる。
・明治３７年ころの街路樹調査記録、麹町区に１９０４本の街路樹、うち１０７５本が柳、４８０本が桜。松が１９３本とある。
・震災復興の復興局の植栽は、街路樹総数１万６０００本、４５％がプラタナス、２８％がイチョウ、１８％がニセアカシア。桜や柳は少ししか植えられなかった。
・昭和２２年神田区と麹町区が合併して千代田区が誕生、初代公選区長に村瀬清氏（神田区長）が選挙でえらばれる。
・千鳥ヶ淵の土手に桜２００本、歩道の街路樹としてソメイヨシノ、都民の憩いの場として内堀周辺整備を大胆に行った。ベンチも置いた。国道も都道も区別なく整備した。その後昭和４０年代、国道は国の管轄となり、桜もベンチも撤去された。
昭和３０年代、首都高が千鳥ヶ淵公園内を貫くことになる。これに伴い桜撤去。
昭和３８年江戸城は「特別史跡」に指定され、千鳥ヶ淵に植えた桜の現状変更は難しくなる。
・ソメイヨシノのいのちは人の寿命と同じくらい。
・継承していくには、戦略が必要。
・日本橋の地下化のように、首都高を遊歩道にするなど考えてはどうか。
・村瀬初代区長が描いた九段坂を桜の名所にという「種まき」は、牛ヶ淵から千鳥ヶ淵まで、平成生まれの「桜の名所」になった。
・「明治の桜」「昭和の桜」そして「令和の桜」のシナリオが求められている。

２　方針に関する集約案（たたき台）

・区の花さくら　―昭和 59 年 3 月 15 日制定（一般公募）―
「日本人の心に咲き続けてきたさくらは、山桜・里桜・大島桜・彼岸桜などに大別されますが、栽培種を合わせると、数百種にものぼると言われています。区内には、いろいろな品種のさくらが植えられていますが、大半が生粋の江戸っ子桜「染井吉野」です。千鳥ヶ淵周辺をはじめとして、多くのさくらが、春には美しい姿で人々の目を楽しませてくれます。」
（千代田区ホームページより）
千代田区議会文化継承・コミュニティ活性化特別委員会は、桜の歴史を文化として継承するのみでなく、子どもたち孫たちの世代にも美しい風景を未来につなげるために必要なことを行政と協力して進めていきます。
１）江戸・明治・大正・昭和へ、桜ヒストリーに関する参考文献を日比谷図書文化館等に資料に整え、千代田区の地域史として、子どもたちに伝承します。
２）染井吉野などの寿命や江戸城史跡指定による、現状変更の困難さについて認識し、九段南の再開発や、地域に多く存在する教育機関とも連携をしながら、現在および未来の桜マップやその樹種のルーツ、ストーリーなどを、子どもたちがわかるように表示し、歩いて楽しいまちを目指します。

委員会資料　２-２
令和6年10月７日

令和 ６年 ７月 3日 文化継承・コミュニティ活性化特別委員会 勉強会
「震災１０１年と桜の継承」

〇小枝委員長　今回は、勉強会のテーマとして、震災１０１年と桜の継承、このタイトルは副委員長のほうでつけてくださり、すごくいいタイトルだと思っているんですけれども、こちらを取り上げさせていただきました。

文化継承・コミュニティ活性化について調査検討を行っている特別委員会です。令和５年５月にこの委員会が設置されまして、この委員会で具体的に取り扱う内容について委員会の中で話し合ってまいりました。昨年１２月５日には、神保町、本のまちの継承と題しまして、神田古書店連盟の顧問である髙山肇様、そして同じく同連盟顧問である八木壮一様のお二人にお越しいただき、勉強会を開催したところです。そして３月４日の委員会におきまして、そのフィードバックを含め委員の皆様から意見を集約した中で、５月３１日に委員会としての勉強会の議題を、桜の継承とすることになりました。今回の勉強会につきましては、このような経緯で開催に至ったところでございます。

なお、この勉強会は、当委員会以外の議員やその他どなたでも傍聴していただくことを前提としておりますので、ご了承ください。

本日は講師といたしまして、千代田区元職員でもあります小藤田正夫先生をお招きしております。

それでは、副委員長のほうから講師のご紹介をお願いいたします。

〇入山副委員長　はい。それでは、お越しいただきました講師をご紹介いたします。小藤田様は１９７５年に千代田区役所に入庁され、千代田まちづくりサポート事業の創設展開などのご功労を経て、定年退職まで勤め上げられました。退職後はＮＰＯ法人神田学会の理事や、東都町造史研究所理事などを歴任し、現在も江戸・東京都心のまちづくりの調査研究を続けていらっしゃいます。また、大学等様々な場所で講演をされている実績もあり、本日貴重なお話を伺えると期待しております。

小藤田様、どうぞよろしくお願いいたします。

〇小枝委員長　はい。ただいま入山副委員長のほうから講師の略歴を紹介していただきました。まさに今回のテーマに精通した方だと思います。

進め方といたしましては、小藤田様のほうから１時間程度お話を頂き、その後、３０分程度を質疑というふうにしたいと考えます。

それでは、小藤田様、よろしくお願いいたします。

〔拍手〕

〇小藤田氏

紹介にあずかりました小藤田です。本日は、よろしくお願いします。

私が区役所に入ったのは、昭和50年で、特別区の区長が公選になり、都から保健所などの業務が移管された時でもあり、今と比べると多くの職員が採用された時でした。

現役時代は、主に神田地域のまちづくりを担当していて、江戸からのまちづくりの歴史を知りたくて、古文書などを随分調べたりしていました。その一方で、坂の上の地域は、

江戸期、武家地だったこともあり、地域の変遷については、あまり調べたことがなく、たまたま、『千代田区のさくら』という冊子を出すので、桜の歴史について書いてくれという話になり、坂の上地域を、ひょっとしたら桜を通して見ていくと、明治以降のストーリーが書けるかなと思いまとめてみました。ですから、今日は、これを皆さんが読まれていることを前提に、その後、新しいことが幾つか分かったので、それも付け加えて話をします。ただ、１時間という枠で１５０年からの坂上の歴史を語るのは、しんどいことで、雑ぱくな話になるかもしれませんが、聞いてください。

この写真、101年前の靖国神社で、おそらく大正12年９月１日の震災直後と思われます。参道の石灯籠がみんな倒れ、境内にはすでに避難民のバラックができていて、テントも張られています。震災直後の緊張感が伝わってきます。

次の写真は、地震の半年後の靖国神社です。今年の正月に能登で地震があって、もう半年も経つのですが、能登とくらべ、靖国神社境内では、９月13日には、もう仮設住宅（九段バラック）を建て始め、何と9月26日には、70棟が完成し、そこに560世帯、２,６４９人を収容する「まち」が誕生していました。この大きな建物は東京市が運営する公衆浴場。この細長い建物は、神保町の救世軍が運営する保育園です。そして、鳥居付近には、ここの住民のお店が並んでいる。そして、この仮設住宅は、震災から１年７ヶ月たった大正14年３月31日には、もう解散式を行い、この仮設住宅は撤去されてしまう。

このテンポの速さというのは、３・11ときもそうだったのですけども、能登の状況と関東大震災での復興の仕方と大きく違うのが感じると思います。何が違うのか、よく分からないですけど、多分、災害が多いから復興にも慣れている。土地を貸す側も使う側も、建物を貸す側も借りる側も慣れていて、いろんなことが、自前のシステムで展開できたのだと思います。火事や地震からの復興のシステムが文化として地域にあったのだと思います。今、被災すると体育館へ行くしかない話とは随分違う。

この写真が、100年前、大正13年の春の写真です。境内の桜が満開となっています。この桜は、維新後に植えられた「明治の桜」で、50年余り経って、満開の花を咲かせています。多分、被災した人々に、すごく勇気を与えたと思います。この桜は、ソメイヨシノですから、クローンであるが故に、一斉に咲いて、春が来たことを見る人に実感させてくれる。林のように植えられたソメイヨシノの明るさと開放感は、江戸期の「桜の名所」で見なれたヤマザクラの個体差のある景観と大きく異なり、新鮮に見えたと思います。

この桜を、靖国神社に最初に植えた人は、木戸孝允だった。若い頃は、桂小五郎と称した長州藩士で、維新後、現・九段高校の所に屋鋪があった。明治10年に44歳で亡くなった。長州藩の後輩の妻である中島茂子が大正７年に談話を残しています。「今の靖国社の境内にある桜樹のことであります。この桜樹は、公が染井から移し植えさせられたのが最初と思います。染井には御承知のごとく、昔から公の御別荘を始め、その付近にも大小多くの桜樹がありまして、年々その苗木が沢山にできます。公が染井から桜樹の苗木を靖國神社の境内へ植えさせられた時には、私にも手伝いを御命じになったことを、今にもよく記憶しています。その後に追々と他からも桜樹を植えまして、ついに今日のごとく境内は桜林となりましたが、公の染井から栽えさせられたのが初めと存じます。」

木戸は染井村（現・豊島区駒込）に別荘を持っていた。そこには桜が植えられ、付近にも多く桜が植えられていた。ソメイヨシノは、江戸後期、染井村の植木職人らによって誕生した栽培品種で、単一の樹を始原とするクローンで、種からでなくて接ぎ木で育て、成長が早く、若木でも花を咲かす。大量に樹形のそろったものを一時に集めやすい品種でした。おそらく値段も安かったと思われます。

木戸は、何故ソメイヨシノを坂上に植えたのか、記録を残していなですが、葉が出る前に大きな花を一度に咲かすソメイヨシノの群落を染井で見ていたと思います。そして招魂社本殿の竣工に合わせて、桜や梅などの樹木を大量に坂の上に移植するのに、結果として樹形のそろったソメイヨシノが多くなったのではないかと私は推測しています。

さて、この絵は、維新の10年前、安政４年10月28日の日付のある絵で、場所は、現在の靖国神社の外苑です。『江戸名所図会』の作者で有名な斎藤月岑が残したものです。この草地は九段坂上にあった「諸侯弓馬稽古場」で、大名や旗本が馬や弓の稽古をする場所で、絵の左側は、現・千鳥ヶ淵緑道に曲がるところ、正面には三番町通（現・靖国通り）の先、番町の屋鋪超しに富士山がよく見えるところだった。この坂上の場所は、明治に町屋が新設されたとき、「富士見町」（現・九段南、北二丁目）と名付けられています。

馬に乗っているのが米国総領事館の通弁官のヘンリー・ヒュースケンで、初代米国公使のタンゼント・ハリスが将軍家定に謁見するため、下田から江戸に出てきたとき同道してきた。彼らは、現・昭和館のところにあった蕃書調所に逗留していた。ヒュースケンの当日の日記には、「宰相訪問と謁見で出かけただけで、まる一週間というもの外出しなかったので、大使は戸外で外気浴と乗馬のできる場所が欲しいと言い出した。馬一頭が方向を変えるくらいの・・・小さな囲いでは物足りなかったがようやく今日、生け垣や樹木で囲まれた、丘の上の広い一郭に案内された。ここからは美しい江戸の全景が眺められる。」とある。絵の奥の林には、神道無念流の斎藤弥九郎の道場があり、木戸孝允は、嘉永年間、ペリーが来る頃、この道場で剣術を習っていた。また、靖国神社に銅像がある大村益次郎は、このハリスが来た頃、村田蔵六と称して、蕃書調所で医術の先生をしていた。坂の上は、長州の人たちにとって、なじみのある場所だった。

写真は、維新前、田安門前から神田方面を捉えた写真（撮影・ベアト）で、まさにヒュースケンの見た「美しい江戸の全景」である。写真左端に九段坂がある。今より狭くて、坂に沿って、段々の長屋門が見える。坂の先には元飯田町がある。坂の右横が、蕃書調所で、ここにハリスが逗留していた。

江戸期の武家地と町人地の大きな違いは、武家地は道路に対して長屋門や板塀で閉じていて、屋鋪への出入の門は一ヶ所しかなく、余計な人を入れない構造となっている。町人地は道路に対して、表店が広く開かれていて、店への出入りは容易となっている。写真は、その特徴をよく示している。

九段坂下に写真では見えないが、俎橋があって、その先に長大な長屋門がある。これは将軍の警護する旗本の番頭がいたので、大きな屋敷があった。このため、神田方面へ行くのには現・日本橋川沿いに護持院ヶ原の方へ行くのが一般的だった。神田祭礼も神田橋から、護持院ヶ原裏を通り、俎橋を渡り、九段坂は段差があるため、中坂を上り、田安御門

を入る道筋だった。
　写真の堀は、牛ヶ淵で、堀に沿った道は「御堀端通」と呼ばれた。写真のように、江戸城が将軍の居城だった頃、御堀端に木は植えられなかった。それは人が隠れる場所をつくらないようにするためで、茂みもつくらない。内側の土手の上とか石垣の上には松などが植えてあるが、法面には、間違って育った樹木もあるが、法面の保護のためにも樹木は基本的に植えなかった。
　この写真は、明治20年代半ばの二七通り。ちょうど帯坂を上がった辺りです。ここに旧旗本屋敷を使った朝鮮公使館があった。もう電柱が立っているけれども、江戸期の武家地の道路には樹木は植えてない。辻斬りが隠れるような場所をつくらないのが原則だった。
　これは、明治20年代の神田多町の青物市場。問屋が集積していて、朝６時からお昼まで道路上に野菜を並べ、相対で取引していた。道路は稼ぐ場所、だから余計なものは植えない、江戸の町には街路樹はない。路地裏には、アサガオや盆栽があったりするが、道路には何もない。
　これは呉服橋。ここに一石橋があって、常盤橋がある。この堀端は城辺河岸で物揚場になっている。ここにも樹木は植えられていない。これが江戸の景観です。街路樹を植えるようになったのは、明治に入って広い通りが整備されるようになってからです。

　明治２年５月18日に函館戦争が終わる。その一ヶ月もたたないうちに、先に見た坂上の馬場（旧幕府歩兵屯所跡）のところに戊辰戦争で亡くなった人たちの霊を祭るため、招魂社の仮殿を造営することを決めて、６月には竣工する。本殿は現在の場所に決めるが、まだ旗本屋敷が残っていたので、明治３年から工事を始め明治５年５月に竣工することとなる。
　神社は、ただつくればいいというものではない。招魂社は維新を象徴する施設です。そこは、人が集まり、賑わう場所にならなければいけない。そのためには、神社に参詣する者が休んだり食事したりする飲食街もセットでつくられている必要がある。招魂社のような神社をつくるということは、新しく「盛り場」をつくるということです。
　近年、新しく神社をつくることを、見る機会がないから分からないですが、例えば、神田明神、江戸総鎮守のような神社でも、氏子のお賽銭だけじゃ成り立たなかった。どうしたかというと、文政12年の頃の図面をみると、社地の周りに町屋があるが、これは、幕府から無償で借りた土地で、神社はこれを町人に貸して、その地代や店賃を維持管理費に充てた。参詣に半日とか１日がかりで来るわけだから、参詣後、御飯を食べたりお酒を飲んだりする場所が必要なのです。そういう近隣の町屋とセットになって成り立っていた。
　招魂社はどうしたかと。国が直轄で運営しようとするのですが、神社境内に続く土地や近隣の土地を町屋として貸して維持費にあてることを考える。明治3年の神社資料をみると、そこの店賃をどうするか、自分たちで分からないので、地域の町年寄に聞くわけです。このときのやりとり資料が残っている。馬場の南側に町屋をつくって、さらに道路をはさんで、千鳥ヶ淵緑道の入口辺から大妻の通りのところまで旧武家地の屋鋪の一皮を町屋として文筆して、道路はさんで両側町となる土地を用意する。それを、幾らで貸したらいいかと問合せをする。そうすると本殿を出たところが一番高く上で、ちょっと離れたら中や下で地代・店賃を決め回答している。こんなふうにして土地を貸して、その上がりでもっ

てやろうとした。
　神社や飲食街をつくっただけでは人は来ない。現在では、鉄道などの交通機関を整備するが、明治初期では、九段坂と下町方面を東西につなぐ道がなかった。江戸期にあった俎橋の先の長大な長屋門を抜いて、新道を明治２年７月につくる。これで須田町から小川町通り、すずらん通り、さくら通りを通って九段坂に至る道ができた。この道はさらに明治10年代に延長され、現・靖国通りの原型もつくられた。
　そして、坂の上には、海からも見える九段の灯明台たる高灯籠＝灯台がつくられた。当時の高さは今の鳥居ぐらいで今より７ｍぐらいの高かった。写真には、坂上に水茶屋とその前につるべ井戸がある。これは江戸期からあり、井戸水は、坂上道路下の玉川上水から引かれていた。
　次の錦絵には、昼も夜も花火を打ち上げて、人集めを行い、堀端には眺めのよい仮設の水茶屋もつくられ、賑わいをつくっている。
　そしてお祭り。招魂社の例大祭が春と秋に開催されるのですが、明治３年秋の例大祭から奉納競馬を始まる。これは明治４年の秋の例大祭の絵ですが、「9月23日競馬、24日・25日角力あり。菊花壇出来、町方に飾りもの等あり。詣人多し。」と、斎藤月岑は『武江年表』に記録している。
　奉納競馬を始めたが、今の大井の競馬場なんかと比べると、馬場は半分ぐらいしか幅がないから、絵のようにみんなコーナーで落馬する。江戸の乗馬は、流鏑馬にみるように走っていって矢を打って、止まるやり方で、走りながらコーナーを曲がるようなことはやらなかった。
　明治の神社では、競馬や角力を神様への奉納として行った。大正時代につくられた明治神宮では、馬ではなく、人を走らせた。「明治神宮外苑競技場」というのはそういう場所です。

　本殿の工事がどう行われたのか、斎藤月岑著『武江年表』の明治３年10月30日に、「招魂社、これまで仮殿にありしを、あらたに御造営の事始りて、日々材木を曳く。飯田町・富士見町の者、おのづから浮かれたちて、オドリ・ネリモノ等を催して賑へり。」とある。新しい神社を造るというのは、地域が総出でもって、お祭り騒ぎをやりながらつくっていった。雉子橋のたもとに、招魂社用の物揚場があった。震災前の雉子橋は、現・日産自動車の店のあるところに架かっていて向きが異なりますが、写真にあるスロープ状の場所が物揚場で、材木を揚げやすかった。本殿に使う「木曽檜」などの材木は、ここから揚げられ、お祭り騒ぎで坂上まで運ばれた。

　明治５年５月に今も現存する本殿が竣工する。神社の記録には、竣工前の「明治５年２月30日、（新暦では４月７日）、社頭の桜開花」とある。写真の桜樹が、木戸が植えた桜です。木戸はこの本殿の竣工に合わせて桜などを植えた。斎藤月岑の『武江年表』には、「奥の方、東向本社を建、社前に馬場を設られ、東の方入口より左右に玻瑠璃の灯籠を建列ね、境内桜樹多く植られたり」と記している。桜の木が目立ったのだろう。参道にはガラスが入った灯籠が並び、境内周りには、かなり大きな桜が植えられている。これも木戸が植えた桜です。

木戸は九段坂にも桜を植えた。これは、明治５年9月2日発行の英字新聞『ファー・イースト』に添付された写真。かなり大きな桜樹が、染井から運ばれ植えられている。
街路樹の始まりは銀座通りで、明治７年に植えられた桜や松などだと言われているが、明治５年に、既に九段坂に植えられている。堀端に植えたから、これは街路樹じゃないということかもしれないが、これが江戸城の堀端に初めて植えられた樹木だと思われる。
明治５年に本殿ができると、堀端の水茶屋などが取り払われる。堀端の桜樹の間に、雪見灯籠や石灯籠が並んでいる。これは、本殿整備で旧旗本屋敷の庭にあったものを移したのだろう。九段坂はまさに招魂社の表参道として整備され、九段下から本殿まで、桜と灯籠で導かれていた。

この図は、明治６年の地租改正のためにつくられた沽券地図ですけれども、富士見町に長岡仁兵衛という人の所有する土地がある。彼は後にここに花街をつくる。また、青物市場もつくる。さらに南平右衛門という人の所有地があるが、彼は、ここに「富士見湯」をつくる。これで一つの新しい町が形をそろえることとなった。また、坂上周辺には、木戸孝允だけでなく、山縣有朋や現・区役所の場所には大隈重信もいた。
そして、現・遊就館の裏側（現・法政大図書館の地）には、英国公使館の外交官アーネスト・サトウの妻・武田兼の住居が、明治17年から昭和51年まであった。明治17年以前は、現・日本歯科大のところに屋敷があり、アーネスト・サトウは境内の桜を見る機会も多々あったと思う。それから現・フイリッピン大使公邸に甲武鉄道の取締役だった雨宮敬次郎の屋鋪があった。甲武鉄道は、新宿から飯田町へ鉄道を敷設するとき、外堀の風致維持のため、桜を植えていった。維新後、桜を植えるような人たちが、坂の上にいた。

明治10年にあった西南戦争が終わり、明治12年に華族一同から石灯籠60基が奉納される。それから明治13年には、花崗石大灯籠一対が馬場入口に奉納される。また、明治13年には、近衛連隊慰霊の剣碑が田安門前に建てられ、この時、初めて田安門の前の土橋に桜樹と唐楓が植えられた。これは明治10年代の九段坂の風景で、九段坂から九段上を見ると、桜が坂の両側に植えられ、石灯籠も並んでいる。九段坂は、まさに神社への表参道となった。
明治11年、さらに招魂社は拡張され、現・九段会館がある一帯が附属地になる。付属地は、神社が焼失した時に、仮殿をつくる場所として用意されたものだった。そして、明治12年6月に招魂社は「靖國神社」に改称される。

千鳥ヶ淵の御堀は、元々は現・半蔵濠とつながっていた。明治34年に代官町通りから土橋がつくられて分離された。この広い千鳥ヶ淵際に、半蔵門近くに明治7年英国公使館ができる。巨大な門が印象的ですが、半蔵門から田安門までの堀端は、広道が続いていた。この公使館前の堀端に、明治14年、桜が三列、四列で植えられた。この写真、公使館内の桜は咲いているが、植樹された樹は咲いていないことから、移植してまもない頃の撮影だとだと思います。それにしても、公使館内には２０m以上もあるような国旗掲揚塔が建っている。明治の外国公使館の景観が良く分かります。
次の写真は、少し年が経った時のもので、公使館内の桜と一緒に堀端の桜も咲いている。

この桜樹は、おそらくソメイヨシノで、咲いていない桜樹は、開花の遅い八重桜で混植されていたのが分かる。明治16年に測量した地図を見ると、200本からの樹木が植えられているが、英国公使館前の緑地には植えられていない。明治14年に桜を植えたのは、アーネスト・サトウという話もあるが、彼は、この頃、植樹の助言はできても、まだ、公使館を代表する立場になかった。ちなみに、この時の代理公使は、ケネディーという名の人だった。

これは幕末期の赤坂見附で、弁慶濠際の建物以外、堀端には何もない。この建物は、玉川稲荷社で、玉川上水のいわば守り神で、樹木は神樹として植えられたもの。江戸期には、御堀端に何も植えないのがこれでも分かる。見附土橋の小土手に明治10年代、ソメイヨシノが植えられ、明治30年代になると写真のような大きく成長した姿となった。

『靖国神社誌』には、木戸が植えた後、明治24年11月に、「境内遊就館前その他へ、桜220本、楓20本」を植え、翌25年12月には、「境内旧馬場の両側、牛ヶ淵附属地へ吉野桜300本、楓50本」を植えたとある。なんと2年間で520本も桜を植えた。明治の中頃の靖国神社には、相当な数の桜と、秋にも楽しめる楓を植えていた。

これが明治３０年頃の牛ヶ淵の桜。明治24年に竣工したニコライ堂が見えます。堀端の土手に人が座っていますけど、この土手のエッジ、すごく維持管理が行き届いているのが良く分かります。

さて、写真の男が、アーネスト・サトウで、写真の右の女性が妻の武田兼。写真の屋敷は現・法政大図書館のところにあったもので、武田兼は、一説だと、英国公使館に出入りした植木職人の娘だという話もあります。真ん中の男はサトウの次男、久吉です。彼は大きくなってイギリスへ留学する。留学先は、先日、今上天皇がイギリスへ行ったとき訪問した植物園。昔から有名な植物園らしくて、彼はそこで勉強して、植物学者になる。日本に帰り、京大などでも教えたりしていたのですが、千鳥ヶ淵にヒカリゴケが見つかった時、彼が学術的に位置づけて、天然記念物なった。そういうことをやった人で、日本山岳会の創立者です。

このアーネスト・サトウは、明治28年5月に駐日英国公使に任命される。そして、明治31年3月に、明治14年の時には植えてなかった公使館前の緑地に桜を自ら選定、植樹して東京府へ寄贈する。これで公使館前の道路は、一群の「桜林」が誕生した。

明治30年代になると靖国神社の姿も大きく変わっていく。明治34年に馬場が撤去になり、本殿前に拝殿が新につくられ、今の形になった。さらに、明治39年、日露戦争が終わった頃、現・靖国通りに路面電車が入ってきた。神社側に道路を広げたので、新に造られたのが今の築地塀だった。馬場側は鎖の柵で囲われた。そして、馬場の中央を通っていた参道両側の石灯籠は外周部へ移され、広場状の参道が誕生する。それは、日露戦争後から大正6年に神苑が改修されるまで、公園のような空間で、馬場の跡地は「九段公園」とも称された。この頃、境内からは田安門が見え、さらに路面電車が走っているのも見えた。こういう開放的な空間が坂上にあった。

これは、明治35年頃の拝殿前の桜です。まだ、空が見えますが、日露戦争後、明治40年代になると空を覆うようになる。ソメイヨシノは上に伸びていきますから、こんなにな

った。遊就館側も空がみえない状態、中島茂子が「桜林」といった姿が明治末期、坂上に誕生した。
　明治30年頃の靖国神社の光景を書いた文章が『東京名所図会』にある。「春暖かに花咲ける頃は、雲かと疑い。霞かといぶかるばかりにて、その佳景、いはむ方なし。若し夫れ東風狂し、落下散する時は、香雪繽紛(コウセツヒンプン)、庭園、為めに白からむとす。紅裾翆袖、互いに其の間に戯れるゝなど、興趣いふべからず。」
　この明治の光景は、現在、千鳥ヶ淵で見る光景と変わらない。「ソメイヨシノの林」がもたらす明るさと開放感にあふれた風景が、当時はあまりにも新鮮であったからこそ、日露戦争が終わった後、全国から坂上に来た人々が、この光景を全国に広めていくことになる。そして、ここの桜が東京の標準木となり、日本の桜前線ができていくこととなる。日露戦争が終わった頃の明治、司馬遼太郎の「坂の上の雲」は、「雲」でなく「桜林」にしておけば、今につながる明治の世界がより鮮明に見えたと思います。

　この広場を歩いている人、江戸幕府最後の将軍慶喜です。彼は写真が好きで自前のカメラで撮ったのですね。明治35年、彼は爵位をもらい公爵になる。これで江戸が終わるわけです。この広場は何に使ったのか。大正４年の春の例大祭の資料があります。広場の両側には、敷地を広くとり興行物に使い、中央の参道周りは、両側に露店が並んだ。これが例大祭初日の写真です。入口左側の大きな建物は、サーカス小屋、それから見せ物小屋がずらっと並んでいる。中央には露店が軒を連ねている。
　２日目になると人で埋まった。さらに、３日目になるともっとすごい人であふれる。これ、東京最大、おそらく日本最大の縁日会場です。今の御霊まつりと違う世界があった。さらに観覧車も出た。それから相撲、大相撲が来て奉納していた。だから観客も集まった。夜はイルミネーションがあり、イタリア人が設計した西洋の御城のような遊就館。その前に蝶々のイルミネーションもあった。さらに、武者行列もあった。これ、ディズニーランドですよ。明治の終わりから大正の初めにかけて、靖国神社境内および周辺はディズニーランドだった。例大祭の時、近隣の小学校は休みだったと聞いています。

　さらに、九段下と九段上で路面電車が明治40年７月６日につながる。当時の路面電車は力がないから九段坂を登れない。堀側に専用軌道をつくり対応した。こういう感じで、田安門前には、田安橋という橋がかけられていた。堀端を登っていって、前の消防署のところ坂上の道路に出て、千鳥ヶ淵緑道のほうに入っていった。
　これは代官町通りの出口から半蔵門方面を見たところ。ここの桜が、明治１４年に英国公使館が植えた桜で、反対側がアーネスト・サトウの植えた桜。ここにも「桜林」あった。
　さらに桜は続く。現在の国道246号線は、明治天皇が皇居から青山練兵場行くのに不便だというので、新しくつくられた道です。そのとき植えられた街路樹は、ソメイヨシノで、赤坂見附の桜とつながった。今の地下鉄半蔵門線では望むべきもないですが、当時の路面電車では花見ができた。
　これは弁慶濠のところですね。弁慶橋の先には紀尾井町通りがあって、ここにも桜が、今もありますけど八重桜が植えられていた。

さらに桜がある。外堀に、甲武鉄道が新宿から入ってきた。四谷濠を分けるように埋め立てて四谷停車場をつくった。この時、飯田町停車場まで、新設された線路端に桜を植える。今、五番町のところの松林、かつては草地の法面だった。ここの下の線路端にも桜を植えていた。これは市ヶ谷から見た新見附方面、ここも線路端にずっと桜を植えていた。これは牛込見附停車場です。ここの先に今、飯田橋の駅がある。ここの堀端にも桜を植えていた。だから、路面電車も省電も線路端には桜が植わり、花見ができた。

さて、富士見町ですが、先ほど花街をつくったと話しましたが、その花街が九段と富士見町に分かれていたのが大正８年に一緒になって、三業組合、待合と料理屋と置屋の３業が組合をつくって事務所（検番）を置いた。それが、現・さくら館のところにあった「九段会館」で、当時のマークが桜の花弁の真ん中に九段の文字、しゃれています。そして、この建物の北側に稲荷があった。それは「出世富貴稲荷大神」という、「富士見町の芸者の守護神というべきもの、社殿の桜、榊の二樹は出世講の奉納に関わる。」『風俗画報』　靖国神社前の花街の芸者さんたちが大事にしたものも桜だった。だから現・さくら館前の大妻通りには、このつながりで桜が植えられたのだと思う。

明治45年、明治天皇が崩御。靖国神社の宮司・賀茂百樹が残した記録に、「実は大正四年のことでありました、当時明治神宮奉斎の御詮議最中で、青山練兵場を其の外苑にするといふ問題が起こった時、赤坂区では靖国神社を其地へ御遷座して頂きたいといふ輿論が起こり、遂に同区では其の請願方を決議した處、麹町区では御遷座反対を決議したような訳です。」とあります。麹町区は何で反対したか。多分、神社だけ御遷座されても、地域は困ってしまうよ。坂の上地域は、神社を中心にした明治生まれの一つの盛り場になっていた。

でも、建設されて50年近くたつと、明治生まれの靖国神社は神社らしくないと、見直しが始まる。境内には、遊就館のような洋式建築物や上野を見る大村益次郎の銅像もあり、神社らしくない。それで見直すこととなる。

大正3年、当時有名な造園家の長岡安平に改修計画の立案を依頼した。彼は大村益次郎の銅像を社頭北側隅に寄せて、鳥居を馬場入口へ持ってきて、さらに神苑の部分が狭いから道路を付け替えることを提案する。また、本殿周りなどは常緑樹で中に見えないようして、参道にはケヤキを植えるようなことを計画する。残念ながら、計画はそのままでは実現しなかったが、大正６年には、現・白百合学園からの道路を廃止して、馬場側に現在ある新道をつくる。それから馬場の両端に寄せられていた石灯籠を、幅8間に整備された参道両脇に戻した。

そして、翌年の大正７年には、28歳の田村剛（東大の林学科卒で、後に「国立公園」の制度をつくる）に改築設計案を委嘱する。彼は卒業後、明治神宮の内苑、外苑の工事の設計を担当していた。彼の設計案には、「参道両側の修飾法としては、一般神社参道の取扱い法に従い、並木帯を設置せんとす。これ参道の主要目的たる参詣者の気分を統一し、崇高の感を抱かしけるに在り。而して並木用樹種としては、あらゆる危害に対して抵抗力大に、しかも喬大なる育成を就げ、その荘厳なる風姿を長く持続し得る条件とするが故に、銀杏を以て、これに充てんとす。元来、公孫樹は東洋の特産にして、とくに日本の神社と因縁深きものあり。加うるに、一時に多数の本数を集むるに容易にして、その移植の容易

なるを思はば、殆ど他に匹敵するものなかるべし。」『靖国神社旧馬場改築設計案』とある。
　イチョウは、それまでも神社の神木などで、植樹されているものも多かった。しかしながら、神社参道に杉並木はあってもイチョウ並木は見ることはなかったが、並木もうけた理由は、「参詣者の気分を統一し、崇高の感を抱かしける」ためだった。イチョウは、真っすぐ伸びる。剪定すれば円錐形になり、成長しても樹形が大きく変わることはない。だから見通せるような景観を整備するのに使い易い樹木だった。また、イチョウは成長が早く、まとめて育て、樹形のそろったものを植えれば、空間が整理できる。明治の初めソメイヨシノを植えた理由と同じものがあった。
　最初にイチョウの並木が植えられたのは、本郷の東京帝国大学。明治45年に正門を造った時、当時の東大総長が、「正面を入ったら万人が自ら襟を正すような厳粛な雰囲気にしたい」と。それでイチョウ並木をつくるがつくられた。この頃から大正、昭和にかけて、イチョウがすごく使われる。東京駅前広場から行幸通りの四列植樹のイチョウ。神宮外苑絵画館前、それから国会議事堂前など、東京の主立った広い街路に使われた。これが、結果として「東京都の木」として指定される理由となったのだと思われる。

　これが改修前の靖国神社です。私はこの何もない広場のような景観が好きですが、次の写真、田村剛によるイチョウが植えられている。まだ外周部に樹木が植えられていなくて、すごく開放的です。こんな空間が坂の上にあった。さらに、神社創建50周年記念で「第一鳥居」が大正9年に建てられ、現在の外苑のイメージがつくられる。

　101年前の関東大震災で、東京のどこの木造建築物が倒壊したか調べた図面がある。見ると、三崎町から神保町にかけて、昔、川のあった低地帯で被害がひどかった。現・区役所近辺で一番被害のあったのは、ここから川を挟んである共立大学のところ、ここに共立女子職業学校の寄宿舎があって、それが倒壊、教職員６名と生徒68名の74名が亡くなった。神田の方では神田駅へ避難していた100人から人が線路の枕木が燃えるような火災で亡くなった。
　これは震災当日、坂上からみた神田方面の火災の様子です。これは焼け跡の光景。ニコライ堂のドームが落ちている。三省堂の前の文房堂という画材屋さんの建物が残っている。今も、この建物ファサードが保存されています。坂下の現・昭和館があるところ。ここには、すでにバラックが建っている。戦災直後もそうかもしれないけど、がれきを集めてきて、仮設の家をつくれる文化があった。これは俎橋。焼失した路面電車がある。坂上の品川弥二郎の銅像も倒壊した。今あるのはつくり直した新しい銅像です。
　これは、100年前、大正13年の春の靖国神社です。仮設バラックを囲むようにて桜が咲いている。これは、まさに「復興桜」ですね。翌年の３月31日、桜が咲く頃、ここの解散式を行う。ここを出ていく人たちは、桜で見送られたのでしょう。こういう坂上の光景が、戦後、復興を担う人たちの記憶に残っていたのだと、私は思います。

　九段坂の震災復興の話をします。勾配の急な九段坂の改修は、最初、俎橋から坂の途中まで橋を架けて、九段下交差点は立体交差にして、勾配を緩くしようとした。でも経費

がかかり過ぎるということで、坂を広げて、路面電車の軌道の勾配に合わせて坂を削り、坂の真ん中を路面電車が通れるようにした。これは削っている時の写真です。現在、歩道橋がありますが、坂上の高さは、元々の歩道橋の上ぐらいだった。坂のエッジを現・千鳥ヶ淵緑道辺まで伸ばすようにして坂の勾配を下げた。だから、現在地に移設した高灯籠は、７ｍぐらい低くなってしまった。

街路樹の話をします。明治の街路樹と震災復興での街路樹の違い。明治37、8年頃の東京市内の街路樹調書によると、麹町区には、街路樹が1904本あり、柳が半分以上の1075本、それから桜が480本あった。これで８割近くを占め、それから松が193本、そんな構成だった。旧15区でも桜と柳で全体の９割近くを占めていた。

震災復興で復興局が植栽した街路樹総数は、約１万6,000本、この内、45%がプラタナスで、28%がイチョウ、18%はニセアカシアだった。この三種類で92%になる。ヤナギとソメイヨシノは合わせて5%しか植樹されなかった。これは言い換えると、ソメイヨシノが大量かつ安価に手に入る時代が終わって、こういうプラタナスだとかイチョウが大量かつ安価に育てられる時代となった。

だから、九段周辺の幹線道路の街路樹は、この三種類の樹木で占められている。靖国通りの九段下から市ヶ谷まで、イチョウが新に植えられる。俎橋から須田町の靖国通りや神田地域では、プラタナスが植えられる。神田は、夏の暑さ対策のためか、プラタナスが多く植えられた。桜は、靖国神社から英国大使館につながる、新設の内堀通り（青葉通り）に168本植えられた。また、道路が広げられた赤坂見附のところも桜を植えている。

これにより、九段坂の景観がどうなったか。これは昭和７年にできた軍人会館の上から見た牛ヶ淵。土手には何も植えられてない。昭和11年に坂の北側に軍人会館と対峙するようにして野々宮アパートというモダンな洋風の集合住宅ができた。ここからは、富士山が見え、九段坂の歩道の真ん中にあるイチョウや、田安門前に新に植えられた桜が良く見えた。この頃、田安門の渡櫓は、潰れて下の門だけが残っていた。今のように復元されたのは、前のオリンピックの時です。九段坂は、神社前の広場も含めイチョウだらけの風景となった。さらに、市ヶ谷方面の区画整理で広げられた道路には、全部イチョウが植えられた。靖国神社側には桜は残っていますけど、南側の歩道の街路樹は、全部イチョウです。

冊子『千代田のさくら』で、私は、坂上の復興事業で「防火のためイチョウを植えた」と書きましたが、植えた人たちは、単に火に強いからではなくて、参道のイチョウとつながり、広い街路空間を設計しやすかったからで、さらに、明治のソメイヨシノと同じで、手に入りやすいということで植えられたと思います。また、かつて、桜と一緒に、秋を彩る楓や唐楓も植えられていたが、東京ではきれいな紅葉とならなかったため、秋に黄色く色づくイチョウが植えられたことも考えられます。

昭和５年、震災復興事業が終わる頃になると、今まで千鳥ヶ淵際を通った路面電車は、内堀通りを通るようになった。ここには街路樹として桜が植えられ、英国大使館前の桜とつながった。写真を見ると、アーネスト・サトウが植えた桜はもう育ちすぎて、この後は、枝が風で折られて枯れていくような姿になっている。千鳥ヶ淵公園の中の桜も、同じよう

な状態となっていた。
　これは赤坂見附の桜、道路を広げたので、新しく植え替えられたので、まだ若い桜ですが、昭和30年代に高速道路ができる時、また植え替えられる。
　これは靖国神社拝殿前の桜。空を覆っていた枝が風で折られて枯れて、桜樹もまばらになってしまった。これが明治の初めに植えられて70年近く経った桜林の姿です。

　そして、九段での戦災。これが昭和20年3月11日の空襲後の富士見町。写真中央に九段会館と称された三業組合事務所があります。今のさくら館の位置。写真奥に九段坂病院が見えたりしますが、大妻通りにあった桜も空襲で焼けて見えないです。
　これは今のフィリピン大使館のところから見た九段坂。これが野々宮アパートで、右端が軍人会館ですね。交差点近くにある建物が東京都公設市場で、後に社教会館になるものです。九段下のまちも空襲で焼け、昭和20年5月26日の中坂と冬青木坂下の光景。左側の娘さんのお姉さんが焼夷弾の直撃を受けて亡くなった。御葬式を町会でやっているようです。こういう悲劇があった。

　戦争が終わった昭和２０年12月、42歳で任命され神田区長になったのが東京都職員の村瀬清だった。彼は、翌年９月14日、旧万世橋駅前の広場で「神田復興祭」を実行する。そこには、三崎稲荷神社の氏子地域から町神輿も参加した。また、神田各町から手製の山車や踊り行列もでているが、東京国立博物館に所蔵されていた旧神田多町一丁目の町神輿も久しぶりに神田を巡行した。
　昭和22年3月15日、麹町区と神田区が合併して千代田区が誕生する。この時、初代区長として選挙で選ばれたのは、村瀬清だった。２回目も公選で、３回目は、都知事の推薦で区議会が承認するというような、任命制になってしまう。その時、彼はすごく制度改正に反対したけれども、結果として周りから押されて３期目の区長となった。
　彼は、「千代田区」を初めて意識した区長だった。日本の軍隊は都心から消えたが、GHQがまだ都心にいる時代、12年間の間にとりわけ皇居周りでいろんなことやった。内堀周りの歩道に萩を植えたり、内堀で白鳥を放し飼いしたりもした。そして、昭和25年には千鳥ヶ淵にボート場を、水上公園としてつくった。さらに昭和26年には、電通50周年記念とかといって、現・三宅坂小公園にあった軍人の騎馬像を取り外して、女性の裸の銅像を作った。さらに５年後、また電通と一緒になって新聞功労者を顕彰するとして、現・千鳥ヶ淵公園に男性の裸の銅像を作った。まあすごい人です。
　昭和30年12月21日の毎日新聞に、千代田区の次年度事業の記事が載った。見出しは、「千鳥ヶ淵と九段には桜並木、都民憩いの場へ二百万円の手入れ」で、内容は、「千代田区では皇居付近一帯を都民の憩いの場所とするため、五年前から内掘周辺の整備を行ってきたが、その一環として来春早々工費約二百万円で次のような美化工事を行うことになった。」「千鳥ヶ淵公園に大谷石で囲った芝生や花壇を造り、道路側に約三百本の八重桜を植えて桜並木を出現させる。また、花壇や芝生の中に噴水を設ける計画を立てている。この工費は約百万円。」「九段坂の両側に植えてあるイチョウ並木を桜に植え替えて桜の名所にする。」「現在内堀周辺には約七十個のベンチがあるが、来年春までには取りあえず五十個を増設、来年内に二百個を備える。また近県の温泉地に呼びかけ、ツツジの寄贈を

受け内堀の土堤に植える。」と

そして、翌年の４月５日には、「江戸城築城五百年千代田まつり」を千鳥ヶ淵公園で開催する。都心でこういう派手なことやると、必ず東京都とぶつかる。まつりは、千代田区のオリジナルな発想で行うということで、太田道灌の江戸築城から500年という名目で開催されている。この日、午前10時から千鳥ヶ淵公園で、安井都知事、英国のデニング駐日大使も参加して、八重桜140本植える。植樹は、300本じゃなくて140本になった。しかしながら、理由は不明だが、「桜の名所」をつくるとした九段坂のイチョウは桜に替えられなかった。

昭和30年代の初めまで、千代田区が区内の国道、都道、区道の関係なく全部の道路の維持管理をやっていた。堀も川も橋も全部、維持管理をやらせられていた。だから維持管理を消極的に捉えるのではなく、「都民の憩いの場」をつくると積極的に捉ええればできたのです。残念ながら、内堀の土手にツツジを植えることはできなかったけども、千鳥ヶ淵の土手に桜を約200本植えてしまった。江戸期では考えられなかったことを、水上公園のボートからの見栄えを良くするということで植えてしまった。ちなみに、北の丸に近衛歩兵連隊がいたなら、絶対にできなかっただろう。そして、千鳥ヶ淵の堀端の歩道にも街路樹としてソメイヨシノを植えた。

最近、毎日新聞のデータバンクを調べていたら、こういう写真が出てきた。昭和３１年４月の撮影で、半蔵門から三宅坂下まで、堀端には、今も見るような大きな樹木が植えられている。よく見ると柵もない堀端には、新聞記事にあったベンチが点々と置かれている。さらに車道際には街路樹として桜が植えられている。村瀬区長は、昭和25年頃から色々と「都民の憩いの場」として内堀周辺整備を行っていたようです。今みたいに、道路管理者別ではなく、千代田区が区内すべての道路等の維持管理をやらされていたことを逆手に取って、国道に街路樹として桜を植えてしまった。

これは、昭和42年頃の千鳥ヶ淵の姿です。桜も大きく育って、歩道上に植えた桜も大きくなっている。昭和50年を過ぎると、歩車道の境に植えた桜の枝が伸びて、バスなどの大型車両が通ると枝がよく折られました。この後始末で、私も坂の上にしばしば行かされたのを覚えています。同様なことが、多分、半蔵門から三宅坂の国道に植えた桜は、昭和40年代の早い時期に撤去され、ベンチも同様のことだったと思います。残念ながら、30年代に国道は国道事務所の管轄となったものだから、区には何も資料が残っていなかった。先輩から桜やベンチのことは、何も聞かされていなかった。今回、写真で初めて気がついたことだった。

昭和30年前後から、戦災復興にむけての記念事業が目立ってくる。『靖国神社略年表』の昭和31年1月25日の項をみると、「東京新聞社の前身の都新聞社は、全国の忠霊塔に桜樹献納運動を提唱したが、募金は戦後の金融緊急処置令により封鎖された。この日、東京新聞社、桜樹献木費313,553円を奉納し、外苑参道北側一帯に染井吉野・山桜百本を植え、3月22日完成す。この頃から戦友団体等の慰霊祭が、漸増するとともに、これを記念する桜樹奉納が増加す。」とある。

これは、昭和30年代の靖国神社外苑の写真です。南側は駐車場で、北側には桜が植え

られている。次の写真は、今年、私が撮影した拝殿前の標準木の写真です。神社内に植えられた明治の桜は、戦後、大分枯れて代変わりが必要になっていた。標準木も戦後、植え替えたものだと思います。そして、写真手前の桜樹には、年表記事にあるような戦友団体が奉納した桜を示す札が架かっています。これはまさに戦後の「同期の桜」ですよね。寿命のある「明治の桜」は植え替えられて、もはや見ることはできない。

これ昭和30年12月に撮影された千鳥ヶ淵公園の写真です。写真の温和そうな外人が前から気になっていたのですが、昭和32年3月13日の毎日新聞の写真記事で分かりました。この人は英国大使のデニングさんだった。彼はイギリスへ帰国するに際して、しだれ桜20本を英国大使館前の緑地に植樹し、東京都へ寄贈した。それは、60年前、駐日英国公使アーネスト・サトウが植樹した桜が枯れたためだった。

坂の上の桜は、明治以来、いろいろな人が植樹して「明治の桜林」をつくってきた。それは、戦後にも引き継がれ、「昭和の桜林」となっていった。しかしながら、この２年後、首都高速道路４号線計画が首都高速道路公団から出てくる。それは、「外堀の弁慶橋から千鳥ヶ淵公園、同水上公園を経て竹橋にいたる間で、付近は江戸城跡、同外堀跡として史跡に指定された文化財で、はじめの計画では半蔵堀や千鳥ヶ淵の土手を通ることとなっていた。」『読賣新聞』

これに対し、文化財保護委員会では、史跡をこわすことで、大問題となり、反対し、二年超しでもめることとなったが、公団側が「半蔵堀付近は千鳥ヶ淵公園下を五百数十メートルのトンネルにし、千鳥ヶ淵水上公園付近は約四百メートルの橋で渡し、乾門街路広場の出入り口に接続する」という計画変更で、昭和36年11月11日了承し、史跡の現状変更が許可となった。

これが千鳥ヶ淵公園に掘られたトンネルの図面です。換気塔が公園内に出ています。昭和38年、この工事をやるために、公園内を開削した。だから公園内の明治14年に植えた桜や昭和31年に植えた八重桜は全部撤去となった。

変更前の高速道路の計画図がないので分からないのですが、多分、現状の線形位置で高架橋にする計画だったのだと思います。千鳥ヶ淵を高架で渡って、千鳥ヶ淵公園から半蔵門を高架橋で抜けて、246号線の高架橋につながる計画だったと思います。さすがにこれは問題ですね。これに反対したのは英国大使館だと、役所の先輩たちから聞いています。

工事が始まった後、昭和38年に文化財保護委員会は、「史跡 江戸城跡」を「特別史跡 江戸城跡」に指定する。これにより、史跡の中でも国宝級の「姫路城」クラスのものとなった。これにともない千鳥ヶ淵の中に植えた桜の現状変更は難しくなり、植え替えにあっては、誰が申請し、文化庁とハードルの高い協議をしていくのか、維持管理のための新しいシナリオが必要となった。

千鳥ヶ淵の中の桜も植樹してから70年も経つ。ソメイヨシノの枝は上に伸びるのですが、法面に植えてあるので、垂れ下がった枝は車に折られることもなく、法面を覆って、特異な景観をつくっている。でも、ソメイヨシノは人の寿命と同じくらいだという。いずれ枯れていく。今後どうしていくのか、戦略が必要となります。それとともに、千鳥ヶ淵

の高速道路橋をどうするのか。日本橋でも地下化を試みている。また、中央区との境の外濠にかかる東京高速道路、廃止して広場・遊歩道にする計画がある。同じように考えるなら、千鳥ヶ淵の橋は、いずれ廃止するにしても、歩行者専用道としてマラソンランナーも走れて、花見ができるような場所にする計画を検討すべきだと思います。

さらに、私は、旧外堀だった日本橋川（常磐橋から雉子橋間）や弁慶濠にかかる高速道路も含め、首都高の再検討が必要だと思います。これ、千代田区がやらなければ、誰もやらないですよ。

それから、昭和48年に地下鉄半蔵門線の工事が始まる。このとき都営新宿線も一緒に工事を営団が九段で行っていた。工事は実に、平成元年まで17年間ぐらいかかった。九段坂下にホームと線路をつくっているわけですから、大量の土砂が出る。また、資材搬入もある。そこで九段坂の堀端の歩道に工事ヤードがつくられ、ここから土砂の搬出、資材の搬入などが行われた。このため、九段坂堀端の歩行空間を確保するため、土手法面にH鋼を打って仮の歩道を整備した。また、九段坂歩道のイチョウは全部撤去（移植して戻したか覚えていないが）となった。

これは平成４年の航空写真ですけれども、坂の途中に新しい出入口ができている。イチョウは歩道の真ん中ではなく、車道際に位置を変えている。そして、なんと九段坂の堀端には新しく桜が植えられている。明治５年に桜が植えられて以来、何と120年余経って再びソメイヨシノが植えられた。また、この航空写真の牛ヶ淵の土手に穴のようなものがたくさんある。これは、土手の法面に植樹されたソメイヨシノです。なんと「特別史跡江戸城跡」内の法面に桜が新に植えられたのだ。

現在、九段下の交差点から坂上を見ると、坂の両側にイチョウがある。これは、靖国神社参道のイチョウにつながり、秋の黄葉時期、九段下から見る九段坂は格別なものとなった。初代区長・村瀬清が九段坂を「桜の名所」にしようと播いた種は、牛ヶ淵から田安門前を経て千鳥ヶ淵にいたる道筋、平成生まれの「桜の名所」として育った。

さらに田安門前の歩道橋から市ヶ谷方面を見ると、震災復興で植えられたイチョウが、市ヶ谷駅まで全部桜に替わっている。何故できたかというと、地下鉄工事の最中、九段上で一坪反対運動等があって、工事がすごく延びた。そのとき地域に九段環境整備協議会ができて、営団や東京都とやり取りして、工事竣工後、桜に植え替えてもらったもの、ここにも、「明治の桜」の記憶は地域に残っていた。

東京都の木は「イチョウ」、東京都の花は「ソメイヨシノ」です。東京では、主立った広幅員の道路に見通し景がつくりやすいイチョウを植えた。でも、花は江戸生まれのソメイヨシノが、小さいときから見慣れていて好きなのですね。

全国の街路樹で高木の樹種は、2022年の調査で561種あるそうです。その中で、一番多く植えられているのは、「イチョウ」と「サクラ類」で、それぞれ８%、52万本づつ植えられているそうです。これは、単に経済的な理由だけでなく、この二つが、春と秋を代表する光景を都市に生み出すからだと思います。

この写真は、今の田安門前の歩道橋で、この上から西を見た風景がこれです。街路樹

は全部桜に替わっているが、この桜も育ち過ぎている。都道だけども、剪定していかないと駄目ですね。そして、その先に見えるのは富士山です。これを隠す雪印の広告、何とかしましょうよ。国立でできるのだから、新宿区側だけど、できないわけない。かつて直参旗本たちが住んだ番町、富士山がよく見え武家地は「富士見町」となった。この風景は、まさに地域のアイデンティティです。こういう核となるものをどうやって維持継承して守っていくのか。さらにいえば、地域の記憶として残る「明治の桜」を引き継いだ「昭和の桜」も年老いていく。次に見るだろう世代のために、「令和の桜」による「桜林」づくりのシナリオが求められている。

最後に、一つだけ写真を見てください。まちづくりの話をするとき、若い人たちにいつも見せる写真です。これは、半蔵門近くの「平河天満宮」入口にある銅の鳥居です。天保15年に神田の職人の手でつくられた立派な鳥居です。ここに寄附した願いが書かれている。鳥居の右側には、「町々安全　商職繁昌」（チョウチョウアンゼン　ショウショクハンジョウ）とある。町々というのは氏子エリアをさし、商職とは、そこに住んでいる町人たる商人と職人をさしている。地域が安全でそこに住んでいる人々が繁盛するようにとのことです。コロナ禍で、安全を取るか繁栄を取るかという話がありましたが、まちづくりの目標は、まさに「安全と繁栄」の実現です。これを両方同時にやらなければいけない。どっちを取るかではない。それが書いてある。

鳥居の左側のほうには「福寿増長　災患消除」（フクジュゾウチョウ　サイカンショウジョ）と書いてある。意味は、幸福なことが増すように、寿命が長くなるように、災害が消え、患いが除かれるようにだと思います。これ、齢70を過ぎると、まさに祈ることですけども。鳥居には、地域や個の願いが書かれている。

寄進した願主の名前は、「四家某」としか書かれていない。分かりますか。こういう鳥居を寄進すると、お金を出した人の名前が書かれるのが普通ですが、「なにがし」としか書かれていない。こういう町人文化を180年前の地域の先輩たちが持っていた。是非、見にいかれることをおすすめします。ありがとうございました。

〔拍手〕

○小枝委員長　はい。小藤田さん、大変、101年、それ以上、駆け抜ける話を伺いました。いかがでしたでしょうか。本当に貴重なお話をありがとうございました。

少し時間がオーバーしておりますので、それでも、１５分ぐらいですかね、どうぞ。

地域振興部長、印出井さんは１０年後輩だということで、この話をもしかしたら何度か聞いているのかもしれませんけれども、理事者の方も含めて、どうぞ。

野沢委員、どうぞ。

○のざわ委員　どうも、小藤田様、ありがとうございました。１５分、駆け足で。

ちょうどこの千代田区、桜は２０２３年までの計画しかないんで、今後の小藤田様も経験から基づくお話を教えていただきたいですが、三つございまして、今たまたま白川委員が、小川町辺りに桜並木を九段下からずっと、あの何でしたっけ、靖国通り沿いとか

に植えたらどうだというお話をされて、なるほどみたいな。で、三つございまして、そこに国道、都道とか、区道がありまして、それぞれの国道、都道に対するアプローチで、どういうふうにしたらそういうのが実現できるのかなとか、あと桜とイチョウを二つ植えるのか、どっちを植えるのか、イチョウを植えたほうがいいのか。二つ出てこられたんで、そこら辺のお考えを教えていただけたらと。あと、イチョウも剪定は大切ですし、葉っぱも実もいっぱい落っこっちゃうんですけど、桜もよくお話の中で道路がぼこぼこになるとか、言い方はあれですけど、コストとか、両方のメリット、デメリットとかも含めて、何かそういうのもありましたら教えていただけたらと思います。よろしくお願いします。

○小枝委員長　お話しできる範囲で。

○小藤田氏　はい。イチョウが火に強いから、震災後、植えたというのですけど、さっき見たように、靖国神社のイチョウを植える理由としては、書かれていない。確かに色々抵抗力があるが、耐火では調べてみると、ケヤキと同じぐらいだという。だから、そういう神話みたいな話はあると思うですけども、やっぱりイチョウは、真っすぐ、そのままの形で大きくなる。そうすると、根が張るので植えるところが広い場所じゃないと無理です。靖国神社みたいな場所であれば、問題ないですが。

で、千代田区で植えたらどこかというと、最初に植えたところは、一丁ロンドンと言われた丸の内の「馬場先通り」、鍛冶橋から二重橋に至る通りです。かつて都庁があった通りに、初めてイチョウを植えた。だから、その後、丸の内はイチョウだらけになった。でも植えるとすれば丸の内くらいの歩道幅員がないと、イチョウはもたないですね。だから、共立のところのイチョウは――。

○小枝委員長　あまり難しい話にお入りになると、別の論争になってしまいますので。

○小藤田氏　はい。分かりました。

○小枝委員長　はい。

○小藤田氏　だからイチョウは、場所を選ぶのだと思います。

さて、神田の桜ですが、昭和11年に東京市が出した資料に、桜の並木が100本以上ある道路が紹介されています。先ほどの国道246号線だとか代官町通りの山桜だとかが紹介されているのですが、一つ変な場所があって、雉子橋と一ツ橋間に138本の吉野桜の並木があると紹介されている。ここは、震災復興で桜を30本植えたという記録はあるが、これだけの本数の桜が咲いている写真を、残念ながら見たことがない。それは、戦後ここが砂利などの物揚場になったため、川端の樹木は切られてしまって、現存していないくて、先輩からも聞いていない。ただ、この写真の樹木は、プラタナスでなく、桜にも見える。また、石垣の上には、桜が植えてあるようです。気象庁の標準木も元々は大手町にあったじゃないですか。だから外堀の石垣の上や内側の敷地の中に桜が植えてあったかもしれない。震災復興で外濠川を挟んで、旧外掘の両側に桜を植えようとしたのかもしれない。この桜が残っていれば、神田も随分違ったのだろうと思っています。

○小枝委員長　すみません。一つ、お話の中で、これまでの歴史は分かったんですけれども、維持、この桜を、みんなが、千代田区民が誇りと思う桜を維持していくために、

私たち区議会議員が意を用いるべきことというか、努力していくべきこと、村瀬区長がスタートというのは分かったんですけれども、何かありますか。知っておけばよろしいんですか。

○小藤田氏　少なくとも、村瀬清は、皇居周辺を「桜の名所」にしようとした。でも九段坂はできなかった。で、千鳥ヶ淵に桜を植えちゃった。植えたはいいけど、あれはもう単純に植え替えできない。それをどうするのかという話。それを皆さん考えなきゃいけない。文化庁に頼んで植え替えさせてもらうのか、新しく、北の丸を通る高速道路の上に桜の林をつくるのか。それは、１本、２本を植えるのではなく、ソメイヨシノを中心に100本、200本単位で植える話。そういう新しい桜林をどうやってつくっていくのか。令和の戦略を考えなきゃいけない。

それから、神田の中にも桜の拠点があるといいのですよね。ソメイヨシノの拠点があって広がっていく流れがほしいですね。

それから、英国大使館のところで縄文の遺跡が出てきた、私はアーネスト・サトウの想いをついで、彼の記念公園でも造って桜を植えれば良いと思う。それを英国大使館と一緒になってやる。千代田祭りも、英国大使館と一緒になってやるようなことも考えていくべきだと思うし、やりようがあると思う。

○小枝委員長　ありがとうございます。

すみません、私がしゃべってしまって。ほかの、ぜひというご質問があれば、どうですか。

田中さん。小林さん。

○小林委員　桜のきれいな写真を見せていただいたんですけれども、貴重な写真なんで、ああいう写真を身近に見たいんですけど、どういうふうに見させていただいて、今、映像でしか見れていないんで。はい。ああいう貴重な写真を、ああいう、目で訴えないと、ここがきれいだというのは分からないと思うんですよね。そういう何か身近で見れる機会とか、そういうのを。

○小藤田氏　ここにも主立ったものを載せましたけど。

○小林委員　ええ。何か身近……

○小藤田氏　東京の古い絵葉書を紹介する本を探せば、あると思います。

○小林委員　そういう何か絵はがきみたいなのとか、売っていたりとか。

○小藤田氏　ぜひ私も整理して、何かこういう冊子を……

○小林委員　やっぱり目で見ないと。

○小藤田氏　冊子を作りたいなと思いますけど。

○小林委員　せっかく、今見せてもらって、すごいきれいだなというのがよく分かるんで、そういう視覚に訴えるのがあれば、復活とかいうことも容易に皆さんの理解を得られると思うので、ぜひみんなに見られるようなことで提供していただければと思いましたけど。

○小藤田氏　はい。分かりました。

○小枝委員長　この冊子も意外と入手するのに苦労したんですけれども、ネット上は載せていないんですよね。クラウドファンディングのお礼のためのものだということなん

ですけれども、もったいないなという気がしますね。
○小藤田氏　もったいないですね。
○小枝委員長　ええ。
○小藤田氏　実はこれ、書いたときページ数が少な過ぎて、もっと書かせてくれと頼んだけど駄目だと言われて、これになっちゃった。だから本当はこういうのに写真を載せて整理したかった。だから別な機会があれば、専用のこういう歴史ものだけで、ぜひやりたいなと思いますけど。
○小枝委員長　千代田区のほうもかなり意欲的に取り組んできていると思うんですけれども、桜に関する予算であるとか、こうしたものを観光とかビジュアルに知らせていくということについては、お考えがありますよね。差し支えなければ、ぜひコラボしていただいて、これは民間のものだよと言われちゃったんですけれども、行政のほうとしても、どこが所管なのかもよく分からないところがあって、こちらは道路公園課です、こちらは、要は桜の担当というのはいないわけですよね。でも、この冊子を見ると、元職員がいっぱい出てくるんですよね。そういう肩書で書いていないかもしれませんけれども、かなり出てこられるんで、非常にこれから行政と民間と研究されている方と、そして議会も、どういうふうにしたら応援していけるのかということは、非常にこれからすぼんでいくんじゃなくて、広がっていくという方向で考えていく上で非常に重要だと思うので、ぜひそれはまた協議させていただいて、小藤田さんのほうにもぜひお力を頂いたらどうかなというふうに思いますので……
○小藤田氏　はい。

○小枝委員長　引き続きよろしくお願いします。
　白川さんのほうは大丈夫ですか。
○白川委員　はい。じゃあ、少し。はい。
　神田に住んでおりまして、区のお花が桜なのに、神田って桜がほんと少なくて、特に、高台じゃない場所というんですかね。そうすると、八重桜みたいなのはちょっと厳しいので、細い桜をずっと植えるというのがいいのかなと思うんですが、いかが思われますか。
○小藤田氏　街路樹として植えるには、結構上に伸びて、枝が下がり、横に広がっちゃうから難しいですよね、あの歩車道の境に植えるのは。真ん中に植えられるような場所があれば桜はいいと思うし。
千代田区の木は、「まつ」じゃないですか。クロマツとかアカマツと言わないで、松一般ですよね、それは江戸城からのつながりで言っているのだと思う。
千代田区の花は、「さくら」で、ソメイヨシノではない桜一般です。桜もソメイヨシノだけじゃなくて、江戸期、町人の屋鋪には、園芸種の多様な桜類が咲いていた。また、武家地の藩邸には、全国からいろんな桜が植えられていた。駿河台の屋敷の庭には「駿河台匂（スルガダイニオイ）」という桜があり、花に強い芳香があることからこの名がついたという。この樹種は、今、太田姫神社に続く「駿河台道灌道」に植えられています。
明治になり、公的な空間で圧倒的に多くなったのは、江戸生まれのソメイヨシノだった。千代田区は江戸からのつながりを大事にしているみたいですね。で、神田は、やっぱ

り土地が低く、水はけが悪いというか。
　○白川委員　低いよね。
　○小藤田氏　だから育ちにくいのだと思います。高台の水はけがいいほうが、桜は育つような、そんなイメージがしますよね。
　○白川委員　分かりました。

　○小枝委員長　それでは、部長、どうぞ。ぜひ、印出井部長のほうから、何かあれば。
　○印出井地域振興部長　じゃあ、お鉢が回ってきましたので……
　○小枝委員長　いや、話したそう。
　○印出井地域振興部長　今、途中で村瀬元区長の取組の中で、白鳥の話がありましたよね。実は最近、白鳥を見かけることはほとんどなくなっているかなと思うんです。正直、何が課題かというと、区の鳥は白鳥で、千代田区に引き続き白鳥がいる風景、お濠に白鳥がいる風景というのを今後どうするのかというのが実は結構課題で、その背景には、白鳥をお濠にいさせるためには羽を切らなきゃいけない。ところが動物愛護団体が駄目だと言っていると。環境省さんも困っちゃっているということだろうと。今後一つの景観要素として、区の鳥、白鳥をどうするのかということについて、これは考えというか、全く小藤田さんの私見でいいので、その辺をお聞かせいただきたいという。それが一つと。
　あともう一つ、今日は出なかったですけども、柳原通り、かつて床店があって、そこで古着を商って、それでもってその周辺の道路とかを環境整備していたと。これは多分江戸から明治に向けてのエリアマネジメントだと思うんです。今日、多町大通りの話が出ました。要は道路空間というものを無償または廉価で民間で使っていくことで、それでもって公共空間なり公共施設を質を高く維持管理していくというのは、やっぱりまさに今のエリアマネジメントと通じるところがあると思うんですけど、やっぱりその思想というのは、やっぱり江戸から明治それから大正にかけてもともとあったんじゃないかなと思うんですけど、その辺についてのコメントを頂いて。
　○小藤田氏　農村部であれば、田んぼから米が取れます、海からは魚がとれる。都市からは何が取れるか。都市から取れるものというのは、働く人が生み出す地代とか、店賃です。それが都市の富の源泉です。江戸期に固定資産税はなかったが、道路や河岸地という公共用地を町人に貸して、そこで得た利益の代償として冥加金を取り、エリアマネジメントをやっていた。
　例えば、江戸期の柳原通りには、古着屋などが集積する商床＝床店とかがあったのですけれども。それは代地で武家地に移転した町が、柳原の土手や道路管理を任され、経費がでないので、柳原通りの道路を借りて、そこに商床をつくり、貸して、その上がりで土手や道路の管理を行ったもので、江戸期の地域自治の単位としての「町」が行っていたタウンマネジメントだった。
　幕府も火除地を使って、都市マネジメントを行っていた。秋葉原にある講武稲荷って知らないですか。昌平橋を渡ってすぐのところに講武稲荷社があります。幕末期に、旗本の近代化のために幕府は三崎町に講武所を造った。しかし、維持管理費がなかった。どうしたかというと、昌平橋の外にあった火除地・加賀原を町人に貸して、その地代でもって講武所を維持した。借りた町人は、そこに花街をつくった。新しい社交場みたいな場所を

つくった。それが神田明神とセットとなり、盛り場として賑わった。
　公共が持っている未利用だけど、ポテンシャルの高い土地や建物を活用していくというのは、地域のまちづくり原資を得るのにとても有効だと思います。ただ、そのとき、役人がやろうと思わないで、志のあるやれる人に任せればよいのです。そしてその原資を活用して目的とする地域のまちづくりを進めればよい。
　江戸期の手法をヒントにして新しいまちづくり手法を考えた。僕らは秋葉原の下島ビルを民間に定借で貸して、店賃を原資として、まちづくりをやろうとした。また、その発展系でやったのが錦町のプラットフォームスクウェア。あそこは、中小企業センターがあったところで、全部貸して、それで新しい地域に入り込むような産業の育成をやってもらい、その上がりを使って、オーナーである「まちみらい千代田」は、目的とするまちづくりを進めていく。そんなスキームだった。
　江戸期、幕府はお金がないのですよ。膨大な武家地を利用して都市マネジメントを行っていた。神田明神に土地を武家地としてではなく、町人地として使っていいよと与えて、それで運営させていった。現在の公共施設だと用途が全部位置づけられているから、それ以外の目的には使えない。プラットフォームスクウェアの時はどうしたかというと、普通財産にした。中小企業センターという行政用途じゃなくて、何にでも使える普通財産に変えて貸し出した。だから図書館を図書館として業務委託するのと意味が違った。そういう臨機応変なことができるといいのですが。
　白鳥の放し飼いをやっていた頃というのは、千代田区が全部濠の掃除から維持管理をやっていたからできたのです。白鳥の子どもも生まれたりしても全部できた。だけど、今はみんな管理者がばらばらになったから難しいですね。でもそれを統括的にやるとすれば、「景観まちづくり」ですよ。地域全体を見てどういうふうに個別の案件に関わっていくのか、その誘導をやるのが、景観まちづくりの事前協議ですよ。都道も国道も関係ない。何かそこで新しい開発をやるといったら、それに対して地域として言っていくような、僕はそういう場所をつくったつもりだったけど、ぜひうまく使ってやってほしいです。
　○小枝委員長　はい。ありがとうございます。大変ざっくばらんに面白い話を頂きました。まだまだお話を聞きたいところではありますけれども、時間が来ましたので、いま一度、小藤田さんのほうにお礼の拍手をしたいと思います。どうもありがとうございました。〔拍手〕
　○小枝委員長　はい。今日のようなお話も、恐らくいろいろな議員さん、知り合っていただいて、区政報告会の様々な場に多分嫌な顔をせず来てくださるんじゃないかと思いますので、どんどんこうしたお話を広げていって共有していっていただけると、九段のほうの町会でもお話を聞いたというようなこともありまして、皆さんすごく感動したというようなことも。だからやっぱりつながっていって共有されていくということで、議会のほうも今日のお話で伺ったことを、頂いた課題を、どうにか乗り越えていくように努力していきたいと思いますので、今後とも小藤田さんのほうにはご支援というかご指導いただきますようにお願いをいたしまして、本日の勉強会を終わらせていただきます。ありがとうございました。
　○小藤田氏　ありがとうございました。
　○小枝委員長　ありがとうございます。